

「赤バス廃止撤回を！」

「存続を求める会」が市区と協議

「赤バスは交通弱者の命綱」「福祉バスの理念守って」。十月二十九日に港区役所で行なわれた「赤バスの存続を求める港区連絡会」（石井ひさ子代表）と港区役所・大阪市交通局の協議には赤バス利用者ら約四十人が参加。大阪市が九月に発表した「来年三月末で港区など大半の赤バスを廃止」の撤回と区長判断による存続を求めました。

「交通弱者の命綱」「採算で考えないで」「不安ぶつける利用者

◆「福祉バス」としてスタート

赤バスは「採算が悪くても市の助成によって支える福祉バス」（大阪市コミュニティ系バス運営補助金交付要綱）の理念のもと、市交通局が「一般の大型バス路線ではカバーしきれない地

点をきめ細かく結ぶ地域密着型のバス」として

二〇〇二年一月に本格運行を開始。運賃は百円

均一（子供は五十円）。高齢者や障害者の移動手

ちようほう

段として重宝され、〇六年には市内全区の三

十一路線で運行されていました。半面、運行本

数の少なさや目的地までの乗車時間の長さなど

から利用は伸び悩み、「市営バスの赤字体質の一

いったん

因」として市は一旦「二〇一〇年度末に全廃」

の方針を出しました。が、利用者の声などを受

けて「キロ当たり乗車人員二・二人の目標を達

成できたら存続」との条件で一一年十月～二二年三月に「需要検証」を実施。その結果を受けて今年九月、現行二十九路線のうち目標を達成できなかった二十六路線（港ループを含む）を来年三月末で廃止すると決めたのです。その上で市は「地域で本当に必要な移動手段は各区長



→「赤バスなしでは生きていけない」など
継続を望む切実な声が相次いだ協議

を中心に検討するように」と指示。こうした経緯を踏まえて今回の協議は行なわれました。

◆「基本理念を貫け」と要望

協議ではまず同会が今年六月と八月に田端区長へ出した「要望書」と、これに対する区長・交通局の「回答」が読み上げられました。

このうち「要望書」は、①「福祉バス」として運行させた赤バスの基本理念を貫くべき②赤バスは実際に高齢者・障害者などの「命綱」となっており、高齢化の今後こそ重要性を増す③「一定以上の利用があれば存続」との市の方針のもと、改善途上での「廃止」決定は許されない④存廃の判断を委ねられた区長はぜひとも赤バス存続の判断を下してほしい」と強調。

◆「廃止が決まった上で検討」と市

これに対して「回答」のポイントは、①赤バスを含む市バス事業は、橋下市長や府市統合本部から「自立した経営」「採算性の確保」を求められている②港区などの赤バス二十六路線は存続の条件を満たさなかったので予定通り廃止する③その上で「地域に本当に必要な移動手段」は区長を中心に検討する——というものでした。

これらを踏まえて意見が交わされました。主なやり取りは次の通り（↓の後は区民の意見や質問、↑の後は区役所・交通局の意見や回答）。

◆なぜ区長が出てこない

↓なぜ区長が出て来ない↑市の指針（団体との協議等の持ち方に関する指針）に基づき、関係する分野の課長が対応している。この協議のことは区長に伝えているし、「回答」への了解も得ている。直接会談したいとの要望は伝える

↓「府市統合本部」とは何か。決議機関なのか↑決議機関ではないが、市長の意向を受けたプロジェクトチームなので、そこで出された方向は検討し、生かしていきたい

◆市長は「赤バス守る」と言った

↓橋下氏は市長選で「赤バスは守る」と言った。ペテンだ。『福祉バス』の考え方は今も生きているのに、なぜ府市統合本部の意向で変わるのか。そもそも福祉バスの存続に条件を付けるのはおかしい↑廃止の方向は新市長で急に決まったのではなく、平成二十二年のアクションプランで既に利用促進の目標値を示していた。市長選の際の発言は承知していないが、存続の

ための条件をクリアできなかったら廃止ということを決まっていた

↓(赤バスの存廃は) 新区長に委ねられたことを前提に、我々は存続を要望している↓現行の赤バスの存続や撤廃は区長の権限ではない。

区長は現行の赤バスの一旦廃止を踏まえ、地域に真に必要な部分について検討する。必要と判断した場合はジャンボタクシーなども含めて検討する↓ジャンボタクシーは車椅子では乗れないのをご存じか↓身障者対応になっていないのは承知しているが、それも含めて検討している

↓(回答に「民営化に向けて」とあるが) 民営化とは結局、儲けが第一。利益が出ないとなると、市民生活を犠牲にしてもやめてしまふ。

市長は良いことのように言うが、絶対あかん

◆赤バスなければ生きていけない

↓目が見えず、年金生活で、家賃を払った残り三万円で暮らしている。赤バスなしでは生活できない。(赤バス)を走らせないのなら殺して

↓赤バスで河村病院までリハビリに行けるといので、住み慣れた田中から波除へ引っ越し、これからも頑張ろうと思った矢先に廃止とは、

←「八幡屋2丁目」停留所9時35分発の赤バス・港ループに乗り込むおばさん。香川県生まれの90歳で、磯路中央公園での毎朝のラジオ体操に参加するのが楽しみという11月5日



一体どうしたらいいんですか

↓赤バスで波除から夕風までリハビリに通っている。無くなったら弁天町のバスターミナルまで歩かなくてはならず一時間もかかる。リハビリ回数が減り、結局は医療にお金がかかる

↓点滴とリハビリに利用している。高齢者は一日で若い人の十年くらい弱る。検討では遅い。(赤バス存続の要求は) 無理難題ではない

↓目が見えず、足も三回手術した。車椅子が必要で、赤バスなら乗れるが、普通のバスは乗れない。なくなったら死ぬということ

↓戦後六十七年。焼け野原から歯を食いしばって日本を造ってきた八十〜九十代の高齢者へのサービスをカットしたらバチが当たる

↓老人だけでなく赤ちゃん連れのお母さんなども利用している。そんな実態を知ってほしい

↓月曜の午前中は通院などでこの協議に参加できない人も多かった。私も点滴を終えて来た。まさに命に関わる問題だ。「真に必要な移動手段の確保を検討する」と区長は回答されたが、その「真に必要な」を実感してほしい

◆空白作らない努力を

↓大正区では(移動手段の)空白を作らないと約束された。港区はどうなのか↓今は調査分析中であり検討中であるとか申し上げられない

↓(移動手段の) 空白を作らないためには年末までの申請が必要とされている。過去に(間に

あさやけ

合わなかった) 苦い経験もある↓いつという約束はできないが、手遅れにならないタイミングで検討結果を説明させてもらおう↓交通局と区の職員は、区長が赤バス存続の判断を下せるよう支えてあげてほしい。我々も力を合わせる

◆とにかく続けてほしい

協議終了後、参加した七十二歳女性(池島)は「右目は全く見えず、左目もよく見えません。コーナンへ買い物に行ったりするのに、毎日、近隣センター前から赤バスを利用しています。とにかく今まで通り続けてほしい。今日は区長さんに来てほしかった。市や区の職員さんたちは橋下さんに押さえられて辛いでしょうが、頑張ってほしい」と話していました。

なお、同会ではこれまでに、赤バス利用の詳細な実態調査や、『遠回り感』(目的地になかなか着けない)を解消するための具体的な改善策を提案。十月一〜十二日には港区役所前で「赤バス廃止の撤回」を求める座り込みを続け、その模様はテレビ大阪などで報道されました。またこの協議の後も、赤バス存続を求める署名活動などを続けています。

「大学」や「学問」というものの在り方を最近の三つのニュースから考えさせられました。

一つは言うまでもなく山中伸弥・京大教授による「iPS細胞」の開発。もう一つはその細胞

を使ったとする東大付属病院研究員による

「臨床応用」の捏造。今一つは西日本短大(福岡市)による「アイドル養成学科」の新設です

▼山中教授は「自然をあるがままに受け入れる」という謙虚さ、「考えるだけでなく変えていこう」という能動性、そして何より「医療の発展に役立ちたい」という社会貢献の姿勢をその研究人生に貫き、結果としてノーベル賞に輝きました。

一方の捏造研究員は真実から心を背け、目に見える成果と自己の栄誉のみを追い求めた結果、学界追放という峻刻な報いを受けました。

また、かの短大は大学としての生き残りを追求する余り、研究の場であることを投げ捨て、芸

能界・産業界に媚を売る退廃を示しましたが、今のところマスコミ受けを果たしています▼学

問の在り方としてどれが好ましいかは賢明な読者なら自明でしょう。が、現実にはあと二つの流れが学術界を席捲していることもまた痛感されるはず。それだけによけい山中教授の言動が爽やかに映るのですが、願わくば、これを機に内外の研究者が財界受けを競う成果第一主義の腐乱から抜け出し、世のため人のためにこそ真実を追求する本来の姿に立ち返らんことを▼

ということでも本紙も、読者数や広告収入を伸ばすことに囚われ、ただ面白く読まれる紙面に走るのではなく、「より良いまちづくり」のためにこそ真実を伝える地域紙本来の姿をこれからも貫きたいと改めて思った次第です▼だからという訳ではありませんが、山中教授に肖って、三十代にはちょっと慣らしたフルマラソンを「もっぺんやつてみよか」と口にし、「(山中さんとは)十以上も違うねんから…よう考えてな」との家族の助言を、このところの秋風の如く、時に爽やかに、時に冷やかに受け止めている今日この頃です。

叫びたい言葉！

今月の提言者

やまだ ひろゆき

山田 博之さん（71歳、築港）



通院者らの利便・安全のため

大阪港駅東口にE/Vを

私は九月十四日、近隣及び大阪船員保険病院の皆様から託された千八十二筆^{ひゃく}の署名の重みを背に感じながら、地下鉄大阪港駅の東改札付近（大阪船員保険病院側）に二基目のエレベーターの設置を求める要望書を交通局に提出しました。十月二十三日、「国からの補助を受けるこ

とが難しい中で、二基目の整備は現時点では非常に困難と考えている」との趣旨の回答書が届きました。私は交通局に協議を申し入れると共に、市会議長に陳情書を提出しました。市会交通水道常任委員会は十一月十三日に開かれます。

◆矛盾感に交通局の答弁

十一月一日、交通局と協議を行ないました。この中で私は、交通局が「エレベーターの整備には埋設物の処理や既設構造物の改造など莫大な事業費がかかるため、国や地方公共団体からの補助金を必要とします」と繰り返し述べている点を取り上げ、「駅舎を新設した段階で埋設物の処理は既に終わっているのではないかと主張。平成十九年、朝潮橋駅に二基目のエレベーターが整備された際の埋設物処理費と既設構造物改造費を明らかにするよう求めましたが、即答してもらえませんでした。

同エレベーターの整備事業費は一億一千万円。大阪港駅の一基目のほぼ半分の費用で立派なエレベーターが稼働しています。デフレ経済のもと、大阪港駅の二基目の整備費用が、同駅の一基目の事業費（二億三百万円）をはるかに超え

ると考える人はいないのではないのでしょうか。

平成二十三年の両駅の乗降車人数を調べました。朝潮橋駅は約六百九十万人、大阪港駅は約六百二十万人でした。障害者や高齢者が身体的苦痛を感じることなく、地上から改札口へ、改札口から地上へ安全に移動できることを願っています。大阪港駅の東改札付近に二基目のエレベーターが絶対に必要です。

◆設置へ世論の変化

昨年八月に要望書を提出した時と比べると、今回、三つの変化がありました。

①大阪船員保険病院との共同の進展。多数の署名を集め、交通局との協議にも代表者を初めて派遣^{はけん}していただき、患者・家族の皆様の願いを代弁してくれました。

②港区選出の市会議員が私の自宅に電話をかけてこられ、エールを送って下さいました。

③田端^{たばた}港区長の施政方針。築港エリアの再活性化ビジョンによる同駅の降車人員の増大目標が明らかにされました。

——世論の変化が、大阪港の潮^{しほ}の香りのように、私には伝わってきます。



独自の防災計画策定へ

区政会議の部会で論議深まる

「港区にふさわしい防災計画の策定を」と港

区政会議（武智虎義委員長 たけちとらよし）の防災部会（野

村好孝部会長 よしたか）が十月三十日夜、港区役所で開

かれました。三回目。委員十二人と区役所担当

者、関係官公署担当者らが地域防災プランの年

度内策定に向けて活発な論議を交わしました。

会合ではまず港区役所の防災担当から①平成

二十四年度重点課題の実施状況②同二十五年度

事業案などについて報告があり、それらを踏

まえて主に次のようなやり取りがありました

（↓の後は委員からの意見や提案、↓の後は区

役所担当などからの回答や意見）。

◆直近参集者制度の充実化を

↓港区には二百人以上の市職員が住んでいる

ちよつきん

が、そのうち十数人を「直近参集者」として

港区の災害時の初期初動体制に組み込み、十月

十七日に初めての訓練を実施した（9頁に記事）

↓見学したが、区役所三階の備蓄物資置き場を

もう少し整理し、標示ももう少し分かりやすく
した方が良いのでは↓今後の参考にしたい

↓港区役所職員で港区在住者はいないのか↓

いない↓地域事情に通じた職員がいたら心強い。

人事異動で配置できないか↓プライバシー保護

の観点などから慣習的に居住区の役所には配置

しないことになっている。が、今後は危機管理

の観点からそういう方向も出てくるだろう。そ

の一方で、この制度が定着すれば、そうした職

員の方が（港区役所の職員より）区の事情に通

じているということにもなつてこよう（区長）

↓直近参集者が二十名足らずでは不安だ。全

員が参集できるとも限らない。一般区民にボラ

ンティア登録を呼びかけ、官民挙げての初期初

動体制を作りたい↓過去の大地震災

では役所が救助に入るまでに三日ほどかった。

その教訓から、まず自助、そして地域、それも

向こう三軒両隣さんげんりょうどなりでの共助体制を築くことが

大切。そうした体制が機能するよう区役所も連

携を強めていきたい（区長）

↓直近参集者訓練は良い訓練だった。その上

で、人員確保の観点からOB職員の登録も検討

→港区にふさわしい防災計画づくりへ活発な

論議が交わされた港区区政会議・第3回防災

部会Ⅱ10月30日夜、港区役所内

したらどうか↓検討する

↓訓練を視察したが、雨降りにも傘入れがなかった。大したことではないようだが、臨機応変の対応という点で気になった↓傘入れはあったが見学者に伝えなかったのは申し訳ない

◆避難ビルの一層の確保に向けて

↓過去の大震災では地域で住民を守り切れなかった。現在も田中・夕風地区では津波一時避難ビルが二カ所。これどうやって皆が逃げられるのか↓防災マップにはまだ載っていないが、現在、夕風の三カ所で津波一時避難ビル協定を進めており、実現すれば、さらに四百名の避難が確保される。因みに八月二十一日現在、港区では公的施設に二九二二人、民間施設に一〇一四二人、計三九三六四人が避難でき、区全体では（地域ごとのばらつきはあるが）夜間避難想定人口の一〇〇％以上、昼間避難想定人口の七〇％を確保、平成二十七年には全地域で一〇〇％をめざしている。（ここまで到達できたことへの）地域の協力に感謝している

↓一時避難ビル指定の条件を教えてほしい↓耐震基準をクリアしていること、所有者と役所

と地域で協定が結ばれていること↓それ以外に基準は↓三階以上の鉄筋造りであること↓広さはどうか↓一人でも多くの避難をという観点から、特に条件はない

◆港湾局公舎なぜ廃止？

↓（前回に「なぜ閉鎖するのか」との質問があった築港の港湾局職員公舎について）平成八年に建設されたが、入居職員の減少が続き、二十二年度には居住率が半分を割った。これでは防潮扉閉鎖の任務は覚束ないので、二百五名の近郊職員が参集する体制をとり、研修・訓練を続けてきた。その一方で公舎の耐震補修には三億円もかかること、近隣から「居住者が少ないのに」もったいない」の声が出ていること、民間に売却すれば地域活性化に繋がることーなどから、遅くとも二十六年三月末までに廃止し、民間への売却を予定している（港湾局）↓防災拠点として十三億円もかけて建設された施設。余りにも安直な処分だ。廃止・売却計画の保留（執行停止）を提案する↓防潮扉閉鎖体制が既に構築されていることから、公舎の任務は終わったと認識している（港湾局）↓存続を求

める市議の意見が出ていることも考えてほしい

◆マンション内避難協定の促進を

↓天保山第五コーポでは垂直避難訓練などをしてきたが、（平成二十五年事業案にある）マンション低層階から上層階への避難協定を促進するという案は素晴らしい↓（マンションの）外との避難協定には抵抗があるかもしれないが、内部でなら可能と考えたからだ↓さらに充実させるために、マンションへの物資購入支援の対象を「災害用工具など」と限定せず、柔軟に広げてはどうか↓携帯トイレなどの支援も検討していきたい

◆物資備蓄の充実を

↓近隣センターや区民センターにも物資購入への支援を考えたかどうか↓備蓄物資は各学校だけでなく、区役所、市全体（阿倍野など）、府全体（八尾など）にもあり、（そうした何重もの体制で）必要な量は届くと考えられる（市危機管理室）↓とはいっても、学校など公的施設の備蓄だけでは限度がある。まず家庭で三分くらは確保してほしい（区長）

◆防災リーダーと避難所開設の不安

↓(自分は防災リーダーだが) いざ災害となり、家族が倒れている時に、直ちに避難所開設へと動けるか不安だ↓(不安は分かるが) 訓練しても充分でないのだから、やらなければいけない。継続が必要だ。まず自分の命を守る、逃げる。その上での避難所開設となる。開設したらまず安否確認だが、それには要援護者の把握、それも(町会の)班単位、向こう三軒両隣(という狭い範囲)での把握が有効だ。防災リーダーについては今後、研修の回数を増やし、各地域でもやれるよう考えている

◆地域での課題点克服を

↓普段から防災訓練などに取り組んでいるが、同じ顔ぶれの高齢者が多くて若い人が少なく、熱心さも人によって差がある↓地域のイベントなどを絡ませたりしながら参加を促していくことも検討している

↓いざ災害という時の対応は非常に難しいが、土台となるのは地域力。町会などの協力で、個人情報の問題もクリアしながら、要援護者の台帳作りなどを進めていくべきだ

◆火災・障害者・水防団・トイレ

↓地震では津波だけでなく火災も起きる。避難経路の確保や火事場泥棒が心配↓しつかり対応したい(港消防署・港警察署)

↓障害者対策がどこまで進んでいるか不安

↓水防団はこれまで主に台風や高潮を想定して活動してきたが、今では地震や津波が重点になり、戸惑っている↓水防法の問題については今後、防災計画策定の中で検討していきたい

↓携帯トイレに困りが付いていないと女性に困る↓基本的には収容避難所で使うことを想定しているのです、そのトイレなどで使ってもらい、(便は)凝固剤で固める。(屋外などでは)毛布などで囲うことになろう

◆積み重ねの大切さ思う

会合の後、防災部会委員の一人、笠井英知子さん(磯路連合女性防火クラブ委員長)は「三回目ですが、論議が深まってきたと感じています。毎回勉強になります。『家族が倒れる中で避難所開設などできるのか』という率直な意見もあり、だからこそ地域づくりや訓練の積み重ねが大切だと改めて思いました。今後も実践を重ねながら論議に参加していきたい。」

◆地域力を土台にしてこそ

同じく防災部会委員の左古昇さん(公募委員、築港在住)は「実際の災害では、例えば津波は綺麗な水ではなくヘドロであることから、(津波が引いたあと)すぐ戻れないなどの事態も考えられます。そんな想定外にも対応できるかどうか、結局はまちづくりの在り方、つまり地域力が問われます。人間関係など地域の絆を普段から強め、いざとなったら助け合える安心感を住民に持つてもらふこと。その上でこそ防災体制も生きてくるのではないのでしょうか」と話していました。

◆区政会議へ報告・提案

なお、港区区政会議は「区政や区の事業について意見を述べ、評価する」ことを目的に昨年七月発足。公募委員や団体推薦委員、区長推薦委員から成り、現在の委員数は四十六。任期は二年。専門部会として四部会が設けられ、防災部会はその一つ。今回までの同部会の論議内容は十一月十二日の港区区政会議の全体会議で報告・提案され、それを受けて十一月二十九日に四回目の会合が開かれることになっています。



→災害時の初期初動体制の素早い立ち上げのために行なわれた「港区役所直近参集者訓練」(写真は挨拶する田端区長^⑥)

地域の安全へいざー！

区役所直近職員が参集訓練

「災害発生時に素早く初期初動体制を立ち上げよう」と十月十七日朝、港区役所で「港区役所直近参集者訓練」が行なわれました。東日本大震災を踏まえて大阪市が港区長の提案により「各区役所への直近参集制度」を九月に立ち上げたことを受け、二十四区のトップを切つて、大阪市危機管理室と共に実施されたもの。

◆地震発生から30分で集まる

訓練では「午前九時に南海トラフを震源とするM9の地震が発生し、津波警報も同時に発令され、港区は震度6弱、公共交通機関は全て停止し、復旧の見込みは立っていない」との想定で、まず区内に住む市職員十数人が九時半までに徒歩で区役所に集合。「途中で見た被害状況の情報収集」の訓練などが行なわれました。

このあと田端尚伸区長が挨拶に立ち、港区の災害や防災の歴史に触れた上で、「三・一一では災害発生から本格救助開始まで三日ほどかかっ

た教訓から、初期初動体制の迅速な構築のために参集してもらった。区民の命と一緒に頑張って守ろう」と呼びかけました。

◆携帯型無線機の操作など

参集職員らは港区役所のリードで、①防災情報システムの操作訓練②庁舎内の備蓄物資や避難所鍵の保管場所などの確認③携帯型無線機の操作訓練を行ない、市危機管理室による市の防災体制などについての研修も受けました。

このうち無線機の操作訓練では、マニュアルを元に「こちらは築港連合、台風二十号の接近により、地域の方が築港小学校に自主避難され



→防災情報システムの操作訓練をする職員^①と携帯型無線機の操作訓練をする職員^②

ましたので、避難所を開設し、報告します、どうぞ」「こちらは港区役所、避難所開設の件、了解しました、職員を二名派遣します、どうぞ」などの交信が、地域の防災リーダーとの間で交わされ、港区役所の担当からは、「ボタンを押して一〇秒後に話すといよい」「最初に相手の名を二回呼びかけ、こちらの名も二回伝えるのが基本」などの操作ポイントが助言されました。

◆具体的な流れが分かった

参加した職員の一人は「実務的な研修が中心で、内容は良く理解できた」、別の職員は「初めてなので、もつと時間をかけた丁寧な説明があればさらによかった」と話していました。

見学した港区区政会議・防災部会の野村好孝会長は「市危機管理室が入った初期初動体制立ち上げの流れが具体的に分かりました。『やってみせ、言つてきかせて、させてみて、誉めてやらねば人は動かじ』の格言にもあるように、こうした訓練をこれからもどんどんやってみせ、防災意識を区民の末端まで浸透させることが大切です。その一つとして大変意義ある訓練だったと思います」と話していました。

福祉

障害者が社会活動

続けられる条件を

外出支援に不合理な規制 是正求める動き区内でも

「外出時に少しでも報酬があればヘルパーを利用できないのか」。社会のために働きたいという障害者の意欲を萎えさせるような障害者自立支援法の決まりや、それに基づく大阪市の指導に対し、「是正してほしい」という動きが港区内でも起こっています。

その一人である五十代の男性Mさんは、平成二十二年十一月に「障害者相談支援専門員」の資格を取り、数人の障害者を相手に有報酬の相談活動が続けてきましたが、自らも先天性の脳性マヒによる障害者（障害程度区分6）であり、重度訪問介護サービスを利用し、移動や移動中の排泄、水分補給、外食時にも介護を必要としてきました。

◆市が「不適切な介護」と判断

ところが今年九月、Mさんが利用している介護事業所に対して大阪市の実地指導が入り、Mさんの相談活動のための外出支援が「不適切な介護」と判断された上、きちんとした介護の実態があるにもかかわらず、「介護報酬の返還」まで指導されたのです。利用者であるMさんには市から何の事情聴取もありませんでした。



→地下鉄朝潮橋駅への移動をヘルパー女性に介助してもらったMさん。電動車椅子を一応は動かせるが、手先が不自由で、足で操作するため、一人での外出は命がけという。「国や大阪市は障害者が社会活動が続けられる条件を考えてほしい」と訴える

◆生きがいになっていたのに…

Mさんは「良心的に介護サービスをしてくれた事業者に申し訳ない」という気持ち、また「せっかく社会参加の実感が得られ、同じ障害者仲間にも喜んでもらえ、生きがいにもなっていたのに、続けられなくなった」という無念さで一杯になりました。同時に、こうした問題は大阪市や他の自治体でも多発していることを知り、「これはどう考えてもおかしい!」と、処分の根拠となった障害者自立支援法の矛盾や、実地指導の在り方そのもののへの憤りも感じようになったといえます。

現在、自身がパート職員として所属する支援事業所もMさんをサポートする人的余裕はなく、自宅から一時間以上かかるほど離れてもいるので、活動が続ける道は事実上閉ざされています。

「せめて最寄りの駅までヘルパーさんに送ってもらえたら」という願いも認められていません。

◆事業者と利用者对立させるもの

Mさんは言います。「障害者自立支援法に『福祉サービスを営業・経済活動に利用してはいけない』という決まりがあることは知っていまし

た。が、私の場合、月に一〜二回のことであり、得られる報酬も月にせいぜい数千円。営業・経済活動という意識はなく、介護事業者にも特にことわってはいませんでした。これは確かに自身身の落ち度です。しかし実地指導の初期段階では、悪質でなければ、まず『注意・指導』に留めるのが通例です。それをいきなり『報酬の返還』というのは、事業者と利用者、特に役所から睨まれたらやつていけない事業者を萎縮させる威圧であり、引いては事業者と利用者を対立させる巧妙な分断策だと言われても仕方がないでしょう。そんなやり方がまず許せません。それに、こうした法律の在り方や行政処置は、国連の障害者権利条約（日本政府は署名だけして批准はせず）にある『障害者への合理的配慮』に照らしても問題があると考えます」。

◆一律に「営業」とみなさないで

そうした思いを込めて、Mさんは現在、市の担当部署（健康福祉局障害者施策部障害支援課）に対し、次のような要求を提出しています。

一、活動の特殊性を考慮し、一律に営業・経済活動とみなさないでほしい。

二、障害者自身が相談支援活動をする意義を十分に考え、続けて活動できる条件を考えてほしい。

三、少しでも報酬が発生する活動（たとえば講演など）の外出にヘルパーが利用できないという話を聞か、もしそうなら改めてほしい。

——生きがいともなった社会活動を封じられたMさんにとっては、どれも切実な願いです。



以上、「障害者の有報酬活動と介護利用」という問題をMさんの経験と思いに絞って見てきましたが、他の自治体でも障害者の外出支援に不当と思われる規制が強まっています。こうした問題が起きる背景にはやはり「財政難」を口実に弱者への公的責任を投げ捨て、縮小しようという国を挙げた流れが見え、Mさんの問題も、その流れの先頭を走る橋下市政のもとで起こるべくして起きたといえるでしょう。ですから私たちはこの問題を、障害者福祉の問題であると同時に、あらゆる分野に共通する国や市の姿勢の問題としても捉える必要があるのではないのでしょうか。

障害者の願い実現へ

あゆみバザー 今年も盛況

「住み慣れたこの街で安心して暮らしたい」という障害者の願いを実現するために毎年続け



→賑わう「あゆみ福祉バザー」 11月

3日、築港3丁目のあゆみ作業所で

られている「あゆみ福祉バザー」が今年も十一月三日に築港の同作業所で行なわれ、多くの区民で賑わいました。築港地域での開催は九回目。主催はNPO法人大阪港あゆみ福祉会が運営する「生活介護・あゆみ作業所」（二十人定員の主に知的障害者が通所する指定障害福祉サービス事業所）。

曇り空の下、会場となった同所の庭や塀の外には、年間を通じて区民から寄せられた衣料や食器などの日用品が所狭しと並べられ、朝十時から午後三時の間に次々と売れていきました。来場者のために設けられた「喫茶コーナー」や「子供コーナー」も賑わっていました。

◆「協力できて嬉しい」

音楽CDや本を買った三十代男性は「今日は作業所の人たちと密接に触れ合えてとても楽しく、ついあれもこれも買ってしまったようになりまし。障害者福祉には行政も力を入れていますが不十分。市民としてできるのはこういう形での支援です」。衣類や文具などを買った五十代女性は「私も生活が苦しいので、必要な物が安く手に入り、嬉しいです。物品提供でも協力さ

せて頂きましたが、弱い者はこんな形で支え合っていくべきだと思います」と話していました。

◆「日曜作業所」からスタート

あゆみ作業所は昭和五十七年、難波養護学校生の父母が中心になり、「日曜作業所」としてスタート。「住み慣れた地域で働き、暮らし、社会参加したい」「語り合える仲間がほしい」という障害者とその家族の切実な願いにこたえて活動が続けてきました。

平成三年には弁天へ、同十六年には築港の現在地へ移転。同十八年十月にはNPO法人の認証を受け、同十九年七月には新施設の完成と共に指定障害福祉サービス事業所へ移行し、新たな歩みを始めています。現在、十五歳以上の重度知的障害者、重複障害者が通っています。

◆求められる区民の支援

同作業所では利用希望者に「気軽に見学を」と呼びかけると共に、事業の一層の充実のために区民の支援を募っています。その方法の一つが「応援する会」への入会。入会方法・年会費など詳細は同作業所（築港三・一〇・一八、☎六五七二・〇七二四）へ。

動物と共生できる街に

野良ねこ避妊手術の「基金設立など」

制度改善へ「市民の会」が要望

「野良猫の避妊・去勢手術のための基金を作
つて下さい」。人と動物が共に生きられる地
域社会をめざして活動する市民団体「犬猫を守
る大阪市民の会」（大阪公園ねこの会）（水上映
美代表）が十月、所有者不明猫（野良猫）を巡
る市の制度の改善を求めて要望を出しました。

◆さらに充実させるために

両会は大や猫を保護したり譲り合ったりする
市民の集まりで、このうち「大阪市民の会」は
平成二十一年、「公園ねこの会」は同二十三年に
発足。野良猫についてはこれまで二千匹以上に
避妊・去勢手術を施してきました。

これに対して大阪市は平成二十二年度に「所
有者不明ねこの適正管理推進事業」（略称「街ね
こ制度」）をスタートさせ、翌二十三年度にはト
ラブルが目立つ公園での野良猫問題の解決に向

けて「公園ねこ適正管理推進サポーター制度」
（略称「公園ねこサポーター制度」）を発足させ
ました。このうち「公園ねこサポーター制度」
は、本紙五月号でも紹介したように、研修を受



→「人と動物が共に生きられる街づくりへ

力を合わせましょう」と「公園ねこサポ

ーター」の活動を続ける尾崎キヌ子さん

〓10月22日朝7時、天保山公園で

けた市民が「サポーター」になり、①公園の猫
に避妊・去勢手術をして増えないようにする（手
術費の約半額を市が助成）②一代限りとなった
猫へのきちんとした餌やりで少しずつ数を減
らす③後始末や周辺清掃で公園の環境美化に
努める—というもの。

同会ではこれらの制度を「行政と市民が力を
合わせる素晴らしい取り組み」と評価しながら
も、「さらに充実させるため」に不十分なところ
を指摘し、改善を求めることになったものです。

◆行政はもっと積極的に

十月十四日には市内で集まりを持ち、メンバ
ーが活動する十三区の区長宛てに同じ内容の要
望書を「大阪市民の会」の名で出すことを決め、
十七日付けで郵送しました。そのうち港区長に
向けた要望内容は主要次の通りです。

一、行政と市民が協力して取り組みを進めら
れるよう、身近な区役所が中心になって「街ね
こ制度」を続け、制度について広く市区民に知
らせて下さい。ボランティア任せでなく、行政
がもっと積極的に関わって下さい。

二、今の「街ねこ制度」では行政の関わり（捕

まえたり避妊・去勢手術をしたりする費用への

援助など」を二匹について「六カ月間」と区切
っています。所有者不明猫の問題は半年では
解決しません。行政と市民が連携して長く続け
られる制度にして下さい。

三、大阪市では、健康局が受け持つ「街ねこ
制度」と、ゆとりとみどり振興局が受け持つ「公
園ねこサポーター制度」があり、縦割りになっ
ていますが、「街」「公園」と区別せず、地域全
体で取り組めるよう一つの制度にし、手続きの
窓口も一本にして下さい。

四、「街ねこ制度」では市全体でおよそ三百匹
の避妊去勢手術予算が組まれています。少な
過ぎます。避妊去勢手術は面的に集中して行わ
ないと効果がありません。予算を増やし、その
財源を賄うために尼崎市のような「動物愛護
基金」を設立して下さい。市全体で難しければ
港区からでも取り組んで下さい。

◆動物好きもそうでない人も

こうした要望運動について、昨春から天保山
公園で「公園ねこサポーター」活動を続け、同
会の港区支部代表でもある尾崎キヌ子さん（六

五）（池島）は次のように話しています。

「野良猫問題の解決へ横の繋がりができた
ことを心強く思っています。また港区の市会議
員さんからも協力するとの言葉を頂き、励まさ
れています。私たちは、ただ動物を排除するの
ではなく、せつかく生まれてきた命を尊重しな
がら増やすことなく、人と動物が共に生きら
れる社会、動物好きな人もそうでない人も共に
気持ちよく暮らせる社会をめざして活動してい
ます。そして『生かすにも殺すにも費用がかか
るのなら、ぜひ生かす方に使ってほしい』とい
うのが、今回の要望を貫く私たちの想いです」。



この問題については「財政が厳しい中で、た
かが猫に…」という声も耳にします。が、市予
算には「カジノ誘致」など巨額で有害無益な使
途も目につき、それらを回せば市内の全ての野
良猫の避妊・去勢手術費を賄うくらい予算
は充分に組めるはず。共生社会という崇高
な目的を持つてせつかく立ち上がったこれらの
制度を形だけに終わらせないためにも、誠実で
前向きな対応が、市や区には求められています。

読者コーナー

得手、不得手

（池島1・勝部泰臣79歳）

不快なことばかりの最近の新聞・テレビ報
道の中で一服の清涼剤は山中教授のノーベ
ル賞受賞。一番感心したのは、手術が苦手と
知っていち早く見切りをつけ、自分の進む道
を方向転換したことだった。「あゝこの人は
やはり何かを持ってる人だったんだ」と納得
した。努力だの根性だのという世間一般の通
念を捨て、自分で自分の才能を生かす道を選
ぶ―勇気のいることだ。凄いと思う。人は
夫々に得手、不得手はあるもの。若い人達に
は将来の進路を決める指針になったろうし、
私達老人には「残りの人生、自分の得意なこ
と、したいことをやって行きなさい」と、坊
主頭の良く似合う、爽やかなあの顔が語りか
けてるように思えてならない。

保育など何でも民営化は良くない

（夕風・50代女性）

ベビーセンターが廃止されることを港新聞

(前号トップ記事)で初めて知りました。産休明け保育や長時間・延長保育や途中入所など、保育の谷間を埋めて頑張ってきたベビーセンターを廃止して、誰でも参入できる手軽な保育ママ制度に一本化するなんて、「一体何のため？」と思いました。「待機児解消」を掲げているとはいえ、やはり、最後に書かれていたように、民営化への流れの中での形だけの安上がりな繕いのような気がします。本当に、何でもかでも民営化するのは、いい加減にやめてほしいです。参入した企業どうしが利益や勝ち残りを巡って競争するだけで、そこで働く人たちにとっても市民にとっても、何一つ良いことはありません。他にもこんな問題があれば教えて下さい。

.....
超熱い！ 防災論議に引き込まれた

(八幡屋・70代男性)

防災関係の記事が二つ(前号5頁、7頁)あり、初めはとっつきにくかったのですが、読み進むにつれ、引き込まれました。論議の内容がとても具体的だったからです。正直言って、東日本大震災があったとはいえ、ここまで真剣に、

熱心に、防災論議が港区でなされているとは思っていませんでした。「ゆうやけ」(編集後記)に書かれてあった「がんりゅうじま 巖流島の決闘」の意味がよく分かりました。私自身、防災に全く無関心というわけではありませんでしたが、「地震や津波が来たら、来た時のことや」くらいに考えて、



→読者の作品から辻悦子さん

(市岡二町3)の絵手紙

地域の防災訓練に参加するでもなく、防災グッズを用意するでもなく、完全に受け身の姿勢でした。これからは広報などにもしっかり目を通して情報を仕入れ、防災訓練にも参加しなければ、あれだけ熱心に防災を考えている方々に申し訳ない(わけ)と思いました。

.....
朝鮮から引き揚げ 千賀さん体験に注目

(弁天、80代女性)

いつも戦争体験を最初に読んでいます。今月(前号)は「北朝鮮でセレブな生活 敗戦で暗転、収容所に八カ月」という千賀万里子せんがまりこさんの体験(43頁)に読み入りました。まず十三歳でこれだけのことを鮮明に覚えておられることに驚かされましたが、何よりも、北朝鮮での優雅だった暮らしが一転して地獄のような収容所生活になった衝撃は、幼い心と体にどれほどのものだったかと心が痛みました。私も十代で経験した空襲の死の恐怖が今も鮮明で、夢にも出てくるほどですが、千賀さんはまた違った形で心に傷を負われたのでしょう。三十八度線越えに出発する所で「つづく」となっていますが、

このあとのご苦勞は更に凄まじいものだったと想像します。またしつかり読ませて頂きます。戦争を知らない若い世代のため、今後もこの欄だけは続けて頂くことを切に希望致します。毎号の取材・編集のご苦勞に対し、僅かですが、カンパさせて頂きます。

敬老大会に港区の温かさ見た

（築港2・50代女性）

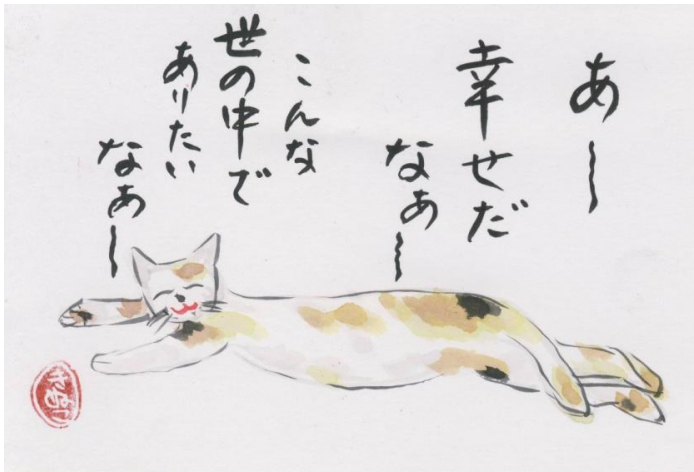
「長年の貢献お疲れ様」（前号17頁）に感銘を受けました。小学生が作文を読み上げたり、地域の人たちが心を尽くして演芸を見せたり、お世話をしたりする姿がとても微笑ましく温かく感じられたからです。以前住んでいた東淀川区では敬老の日にこんな催しはなかったと思います。こちらに移り住んで四年ほどになります。こんなところにも下町・港区の温かな地域性が出ていると感じました。

美德培った神仏 雅楽鑑賞会つづけて

（港晴4・40代女性）

「神仏の加護で地域の幸福を」と題した天満

宮での雅楽鑑賞会の記事（前号31頁）を読みました。当日の様子が手に取るように詳しく書かれ、写真も美しく、私も実際に鑑賞した気分になりました。また、初めて知った「大祓詞」には罪や過ちを祓い清める役割があり、「声明」には平和への願いや自己中心への



→ 読者の作品から尾崎キヌ子さん

（池島3）の絵手紙

戒めなどの意味が込められていることが分かり、興味が湧きました。「日本人の美德は神仏に向き合う中で培われた」という宮司さんの言葉にも共感を覚えました。こうした取り組みがこれからも続くよう願っています。意義ある記事がありがとうございました。

語りが懐かしい 楽しみな新シリーズ

（市國元町・60代男性）

毎号楽しみだった「団塊つれづれ草」（昨年六月から今年九月まで連載）が終わり、ちょっと寂しく残念に思っていました。が代わって「ヤツさんの今昔紙芝居」「ふるさとの話をしよう」の二つのシリーズが始まり、とても嬉しいです。岸本安司さんの油絵「母と子」の思い出、川井稔さんの隠岐の島での「精霊船」の思い出は、どちらも自分が見たり経験したりした訳ではないのに、とても懐かしく、不思議な感じがしました。これからもどんな思い出が語られるのか、とても楽しみです。

催しガイド

■池島ふれあいまつり

地域の誰もが交流し楽しめる健全な文化の場として町ぐるみで盛り上げる恒例イベント。三十二回目。十一月二十三日（水祝）十時十五時半、池島公園（雨天時は池島小講堂）で。入場無料。①ふれあいステージ（幼児や小学生の歌や踊り・和太鼓演奏・人形劇・大道芸など）②ふれあい広場（ミニSL・



トランポリンなど）③いこいの広場（わらざうり作り・ふれあい喫茶など）④ふれあいキッズ（紙芝居など）⑤模擬店・バザー——など楽しい企画が毎年好評■写真は今年の会場風景。池島地区社会福祉協議会と海の子学園池島寮が主催。

☎六五七一・〇二〇〇海の子学園池島寮。

■地域元氣フロッレス

「港区を元気に！」「子供たちに勇気と正義感を！」と力道山時代の懐かしいフロッレスを再現。十一月十八日（日）十三時から港区民センター（弁天2）のホールで。前売二千円（当日二千五百円）。☎〇九〇・一九六一・四一八四みなとフロッレス。

■障害者相談所「ほのぼの」が好評

毎月第三火曜十四〜十六時、八幡屋商店街のヤハタヤ・プラザで。港区障害者地域自立支援協議会事務局（障害者福祉の連携チーム）のメンバーが、障害者や家族・支援者の話を聴き、アドバイスする。①障害者手帳を取得する方法②サービス・制度の紹介や手続き③職場の人間関係への対応④作業所の紹介⑤就職活動のサポート——等々。問い合わせは港区保健福祉センター保健福祉担当（TEL六五七五・九八五七、FAX

六五七二・九五二四）へ。

■自閉症児を応援する気エネルギーワーク

プロの気エネルギー療法士が「自閉症児の体や心が少しでも楽になれば」と続けている。「気楽な参加」を呼びかけ。参加費無料。要予約。毎月第二・第四土曜（十一月は二十四日、十二月は八・二十二日）十五〜十八時に松井整骨院内で。弁天四・一〇・二六、☎六五七二・一一六五。

■ムチ打ち（首・腰）無料相談会

交通事故でムチ打ちになった被害者を対象とした無料相談会。十一月二十五日（日）十〜十八時に行政書士のむら事務所（築港三・七・一・六〇八）で。一人約一時間。事前予約制（電話かEメールで。「どうしても正しい補償が得られるかをアドバイスします」「事故後、早めの相談が良い結果につながります」（同事務所・野村光恵さん）。Eメール…info@jikkoll10.nomura.com、TEL…六五七六・六〇七八、FAX…六五七六・六〇七九。

舌鼓うつて復興支援

区老連「さんま祭り」超活況



→三陸沖で獲れた秋刀魚を次々と炭火で焼き上げる港区老人クラブ連合会の男性会員ら110月27日、夕風公園で

「東北産の秋刀魚を食べて東日本大震災の被災地復興を支援しよう!」と十月二十七日、秋晴れの夕風公園で、旬の秋刀魚を主役にしたユニークな催し「さんま祭り」が開かれ、賑わいました。港区老人クラブ連合会（区老連）の主催、港区老人福祉センターの共催で初の試み。

◆夕風公園に長蛇の列

「五百円で焼き秋刀魚十おにぎり十お茶」という手頃な価格設定も効いて、午前十一時半の開会前から同公園には長蛇の列。区老連の男性会員らが三陸沖で獲れた大量の秋刀魚を炭火で次々と焼き上げ、女性会員らが前売り券などと引き換えに来場者へ手渡しました。

午後一時ごろまでに数百人が訪れ、昼食に持ち帰ったり、同公園でビールやおにぎりと一緒に舌鼓を打ったりしていました。待ちの行列が余りに長いため、役員らが「暑い中で気の毒やし、生でもええ人には生で持つて帰ってもらおか」と相談する光景も見られました。

◆焼き加減に工夫

汗だくで秋刀魚を焼き続けていた中野憲雄さん（六三）（池島）は「秋刀魚を焼くのは初め

です。遠火でじっくり焼くのがベストですが、予想以上にたくさんの方が来られたので、時間との勝負ということもあり、強火にして水をかけながら手早く焼き上げています。火の加減や水をかけるタイミングが難しいですね」と話していました。

◆何回もやってほしい

特設テント内で缶ビール片手に秋刀魚をつついていた山下貴夫さん（七六）（港晴さくらクラブ）は「青魚は大好きで、晩の食卓には必ず載せます。復興の役に立ちながら美味しい秋刀魚も食べられる。年二回でもやってほしいわ」。



→長蛇の列をてきぱきと捌く女性会員たち①と公園の一角で秋刀魚を肴に憩うグループ②

木陰で秋刀魚を肴にお喋りを楽しんでいたのは馬場悦男さん（七九）ら弁天長楽クラブの約二十人。「うちのクラブは仲がよくて、よく集まります」「今日は秋刀魚を食べながら被災地復興にも役立つと聞いて、喜んで集まりました」などと口々に話していました。

◆大船渡市と相談して実現

区老連・原田 壽会長や同センター・寄田館長によると、この催しは「被災地復興のために何ができることをやろう」と役員会で立案。岩手県大船渡市に相談したところ、感謝と賛同を得られ、実現しました。同市役所から「大船渡のさんま」と印刷したTシャツを購入、秋刀魚は六百五十尾を仕入れ、収益を寄付しました。

原田会長は「来年は大船渡市から特産物を携えてお見えになるそうで、さらに盛り上がるでしょう。復興の目途がつくまで続けたいイベントです」。小西昭人副会長は「今朝は六時半ごろから皆で準備にかかりました。初めてなので量の予測がつかず、迷惑もおかけしたようですが、来年はもっとうまくやれると思います」と話していました。

福祉

地域と溶け合い37年

笑顔溢れた「海の子まつり」



「児童養護施設のことを地域の人たちに知ってもらおう」と十月二十七日、「海の子まつり」が池島三丁目の「海の子学園・入舟寮」（社会福祉法人「海の子学園」が運営）で開催されました。三十七回目。朝十時から午後二時まで、園生、職員、保護者、OBら関係者に加えて地域の人々が多数訪れました。

●食べ物や遊びが一杯

爽やかな秋空の下、明るいBGMが流れ、「安いよ」「うまいよ」と元気な呼び声を響かせる園生たち。自分たちで準備した綿菓子、たこせん、豚汁などの飲食屋台や、千本釣り、的当てなどの遊びコーナーに来場者が次々と吸い寄せられていきます。中央の縁台で飲食する家族連れの表情はまるで自宅にいるかのよう。バザー会場では信じられない安さの品々に女性たちが興奮気味に手を伸ばしていました。

三十七年間に亘るこうした地域に開かれた活動の積み重ねが、この施設をすっかり地域と溶け合わせたように感じられました。

子供二人と会場を回っていた国方裕子さん（池島）は「子供の友だちがこの施設にいる関

「秋空の下で笑顔が溢れた海の子まつり」

係で参加しました。バザーの品がとても安く、食べ物も美味^{おい}しい。普段あまり知られていない施設のことを地域の方たちに知ってもらおう良い催しだと思います」と話していました。

●一緒に準備するのが楽しい

クッキーなどの売り場を担当していた男性職員(三二)は「子供たちと準備するのが楽しいです。役割分担など毎回苦労しますが、大勢の方が喜んで下さるのを見ると、やって良かったと思います。子供たちが普段とは違う姿を見せてくれるのも嬉しいことです」。たこせんを食べながら休憩していた同学園の五年生男児は「綿菓子が担当です。うまく回すのは難しいですが、練習して出来るようになりました。寮では皆と一緒に遊ぶのが好きです」と話していました。

●2518歳が集団生活

同施設は昭和二十四年、^{はしけ} 船労働者の子弟^{しでい}を養護する「海の子の家」として設立。現在は児童福祉法に基づく児童養護施設として、保護者の病気や離婚など様々な事情から家庭で生活できない二〜十八歳の子供たち(定員百人が、保育士らに見守られながら集団生活を送っています。

健康

ヘルシームード一杯

雨にも負けず「健康まつり」賑わっ

「区民の健康生活を応援しよう」と十月二十八日、磯路中央公園で「健康まつり」が催されました。大阪きつがわ医療福祉生活協同組合・



→健康的な企画に参加者の笑顔が溢れた「第26回健康まつり」(写真は「健康チェックコーナー」での測定風景)

みなと健康まつり実行委員会(磯路)が主催。

二十六回目。本降りの雨にも拘^{かか}らず、朝十時から午後三時ごろまで多くの区民が訪れ、健康をテーマにした多彩な催しで賑わいました。

◆健康は未来をつくる

開会式では足立敏博^{としひろ}実行委員長が「健康は未来をつくる。医療・介護などの福祉活動をはじめ、東日本大震災の被災地支援、原発ゼロ運動などにも地域で取り組み、明るい未来へ力を合わせましょう」と呼びかけ、築港中吹奏楽部が「日本を元気にするメドレー」「津軽海峡冬景色」などの演奏でオープニングを飾りました。

このあと舞台では民謡、詩吟、フラダンス、歌体操、太鼓、^{たいきょけん} 太極拳、コーラスなどが次々と登場、盛んな拍手と声援を浴びていました。広場には同組合の各支部やサークル、諸団体や店舗によるフリーマーケットや飲食屋台などが並び、盛んに呼び込みを行っていました。

◆人気の健康チェック

中でも毎年人気の「健康チェックコーナー」には今年も開場と同時に多くの人たちが次々と訪れては血圧、体脂肪率などの無料検査を受け、

←オープニングを飾った築港中学校吹奏楽部の演奏①と、浚刺とした動きで会場を元気づけた健康教室歌体操の舞台②



結果に一喜一憂したり、診療所職員からアドバイスを受けたりしていました。

◆出会いや交流が楽しい

参加者のうち、健康チェックを受けていた藤野敏子さん（五三）（三先）は、「血圧や体脂肪などのチェックを受けました。出来るだけ歩くような心がけたり、六月からプールへ通ったりしています。まだ運動不足ということなので、こうした運動を一層しつかり続けていきたいと思いました。この催しには三先支部の一員として毎年参加していますが、健康を共通の目的に

地域の色々な人たちと交流できる、とても素敵
な催しだと思います」と話していました。

非常食の無料配布で助け合い

「白い小箱運動」に注目

「健康まつり」の中で注目されたコーナーの一つに「白い小箱運動」がありました。これは非常食セットの無料配布運動のことで、一般社団法人「日本非常食推進機構」（JEF O）のスタッフがアピールしていました。

このセットは①非常食（保存食・二食分）②ブドウ糖③飲料水④防寒シート⑤尿取りパツ



→「白い小箱運動」をアピールするJEF Oのスタッフ①と、非常食セットの中身②

ト・ポケットティッシュセット）から成り、簡易トイレにもなる白い紙箱にコンパクトに収納。これを各家庭に無料配置することで「日本全国どこにいても相互に助け合える仕組み」をつくらうと、現在、行政・企業団体の協力を求めている。全国キャラバンを展開中ということでした。

古谷賢治代表理事は「いつどこで起こるか分からない災害に備え、自助・共助・公助の仕組みをつくるのがこの運動の目的です。ぜひ多くのご参加をお願いします」と話していました。

なお、この非常食セットは保管期間（三年）を過ぎると回収して海外の飢餓地域への食糧支援に回され、保管者には新品が提供されます。

また、この小箱の梱包・配布作業は各地域の授産施設に依頼され、障害者の就労支援や社会参加にも役立てられるということでした。

この運動についての問い合わせは同機構（三重県四日市市浮橋一・四・一三、TEL：〇五九・三二八・五三四五、FAX：〇五九・三五一・一九一七、Eメール：nrj44425@nifty.com、ホームページ：http://shiroikobako.org/）へ。

労働者と住民が二つに

港合同「交流秋まつり」盛況



→労働者と地域住民の一体感が印象的だった「第34回交流秋まつり」11月10日28日、南市岡の田中機械ホールで

「秋の一日を労働者と地域住民が一緒に楽しむ」と十月二十八日、南市岡三丁目の田中機械構内で「交流秋まつり」が開催されました。

三十四回目。港区を中心とする中小企業労働組合の集まりである全国金属機械労働組合「港合同」ともちつき実行委員会が主催、「平和と福祉」を掲げて活動する特定非営利活動法人「NPOみなと」が共催。雨について数百人の労働者と地域の人々が集まり、舞台での演芸や屋台での飲食、バザーなどを楽しみました。

◆カラオケやタンゴ、抵抗歌も

舞台ではカラオケ大会に始まり、原発事故被害者支援の一環として出演した抵抗歌シンガー趙博ちやうはくさんの歌や、金野広美かねのひろみさん（勤労者サークル協議会）のアルゼンチンタンゴ、バンド演奏、ジュエスチャーなどが次々と登場。屋台ではビールやおでんなどが低料金で売られ、爭議組合支援のバザーは完売の盛況。「将棋コーナー」や「こどもコーナー」も賑わっていました。最後は全員参加のビンゴで盛り上がった後、万国の労働者の団結歌「インターナショナル」を腕を組んで合唱、高揚のうちに幕を閉じました。

←抵抗歌で盛り上げた趙博さん①と異国情緒で魅せた金野広美さんのアルゼンチンタンゴ②



◆大人も子供も楽しめる

子供コーナーで我が子（十一歳と三歳の男児）とビンゴを楽しんでいた渡辺恵美子えみこさん（波除）は「金属会社の組み立て職場で働き、組合活動もして六年半ほどになります。毎年参加していますが、子供も大人も楽しめる素敵な催しですね。社会のことでは被災地の復興が気になります」。舞台のカラオケ大会に拍手を送っていた中西花子はなこさん（八〇）（南市岡）は「ここには温泉などで普段からお世話になってます。糖尿病なので、何にでも積極的に参加しようとやってきました。世の中のことでは地震や津波や富士山の噴火が心配。一生懸命働いて月三万円の年金もえげつないわ」などと話していました。

生き生き学びの成果

港中学校の文化発表会から



→ 美しかった3年生制作のステンドグラス

学びの成果を生き生きと発表。港区の五中学校では十月下旬から十一月月上旬にかけて「文化発表会」が開かれましたが、このうち港中学校を十月三十一日に訪れ、作品展示を鑑賞しました。同校の今年のテーマは「希望」でした。

◆戦争体験を聴き取る

どの展示からも学びや物づくりや体験の喜び、感動が伝わってきましたが、中でも生徒会役員が八幡屋の老人介護施設「愛港園」の入居者から聴き取った「戦争体験」が心に残りました。「一九四五年六月の大阪大空襲で港区は全て焼けてなくなった」「妹を助けてくれた人がB29にやられた」などの悲惨な体験談を、聴き取った人ごとにコンパクトにまとめ、「戦争は人の体だけでなく心にまで深く傷を負わせている」と、体験者に思いを寄せた感想を記していました。

◆職場体験を新聞形式で

ユニークだったのは、二年生が職場体験を新聞形式で「報道」していたこと。このうち大阪市港湾局の仕事を体験した男子生徒は、①職員さんが優しくかったこと②地震と津波のビデオが分かりやすかったこと③防潮扉は見た目より

軽く動かせたこと④網の破れの補修は難しかったこと⑤紐の結び方には「男結び」など色々あったこと」などを生き生きと記事にし、写真五点を入れて紙面を構成していました。

◆創作の苦労と工夫

家庭科の手づくり絵本の展示では個性的な作品の数々に保護者らが目を奪われていました。このうち三年生男子は「しんかい6500とぼくのたからさがし」のタイトルで海底の様子や鯨を描き、「苦心したところ」として、①深さを表現するためグラデーションを用いたこと②鯨をリアルに表現するため色々と調べたこと③海底火山の噴火を立体的に表現するため毛糸を使ったこと―等を具体的に書き留めていました。

◆幸せな国フータンを紹介

社会科の「国しらべ」では、先進国だけでなく小さな国の研究も目立ちました。このうち「世界一幸せな国 フータン」を紹介した二年生女子のレポートでは、「国家は国民の幸福を目指し、国民も『たとえ自分が幸福でなくても周りが幸せであれば自分も幸せである』『小さなことにも感謝と喜びをもつ』と考え、国民の九七割が幸

せと感^あじている」と、先進国にはない国の在^あり方に着^{ちやく}目^{もく}していたのが心に残りました。

◆豊かな感性 社会への目

創作短歌では、「焼^いき芋^もを あの子と二人で 半分コ カイロがわりの 散歩道^い」(二年生女子)など、豊かな感性と自由な発想に溢^{あふ}れた作品が何首も見られました。

生徒会が廊下の壁に制作した「希望の樹^き」には、葉の一枚一枚に一人ひとりの夢が書かれてありましたが、個人的な希望と共に、「戦争が絶対起こらない世界に」(二年生女子)「みんなが信用できる世界に」(二年生男子)など、社会に目を向けたメッセージも目を引きました。

◆物づくりの喜び伝わる

熱心に鑑賞^{いとうみき}していた伊東美紀さん(三年生女子の母親)は「娘の作品だけでなく、他の生徒さんの作品も見えて回りました。印象に残ったのは家庭科の手づくり絵本。物づくりの苦労や工夫、喜びが伝わってきました。また職場体験の報告では、学んだことをしっかり伝えようと新聞形式にしていたのが面白く、引き込まれました」と話していました。

スポーツ

秋空に笑顔弾けた！

波除の運動会に2千人



→秋晴れの下、2千人以上が様々な競技を楽しんだ波除地区の運動会11月21日、波除グラウンドで(写真は入場行進)

秋空の下で地域のパワーと笑顔が爆発。十月は区内の各地域や団体で運動会が開催されましたが、二十一日には波除グラウンドで「波除地区・町会親善ワイワイ大うんどうかい」が行なわれました。十四町会から二千人以上が参加。夏を思わせる日差しの中、競技に汗を流したり声援を送ったりしながら住民間の親睦^{しんぼく}を深めました。隔年開催^{かくねん}で二十一回目(第十四回までは毎年開催)。同地区の各町会、青少年指導員会、青少年福祉委員会、連合子ども会が主催。

◆「親睦を第一」と小山会長

午前八時四十五分、パンパンパンという爆竹音を合図に、波除学園の園児鼓笛隊^{こてき}の先導で各町会チームが個性的な装いで入場行進。小山勝^{かつ}稔大会会長が「親睦を第一に八〇割ぐらいの力で、事故のないよう水分補給もしながら今日一日を楽しく」、来賓の波除小学校・一色省治校長が「波除小は創立六十周年。卒業生一〇五三八人が活躍^{みなもと}しているが、そのパワーの源を見た」と挨拶。前回優勝チームの男女が爽やかに選手宣誓し、熱闘の幕が落とされました。

◆あめ喰い競争など次々

競技は「あめ喰い競走」を皮切りに、「大玉ころがし」「パン食い競走」「幼児競走」などが昼休みを挟んで次々と行なわれました。中でも町会対抗の「二人三脚」「徒競走」などには各町会のテントから熱い声援が飛び、順位がかかった終盤の「綱引き」「玉入れ」「大人リレー」では盛り上がりがピークに達しました。午後三時ごろまで続いた熱戦の結果、波除二丁目東町会が一二〇点で優勝、四丁目北町会が九二点で準優勝、一丁目中町会が八三点で三位でした。

◆「交流こそ楽し」と参加者

一丁目中町会チームの一員として「大玉ころ



→コンビの息が問われた二人三脚(上)と

大玉ころがし(下)

がし」に出場し、「白組」勝利に貢献した小林和子さん(七五)は「とても楽しかった。毎回参加していますが、勝ち負けよりも、普段会えない人たちと顔を合わせられるのが楽しみです」。波除二丁目東町会の一員として「パン食い競走」に出場して一位になり、玉入れや小学生徒競争にも出場した高見英佑君(波除小三年)は「友だちと一緒に走ったり、友だちの頑張っている姿を見られることが腹から楽しいです」。

優勝した波除二丁目東町会チーム代表の浜田

信次さんは「優勝は久しぶりで、三回目くらい。団地の年寄りの経験と、マンションの若い人の頑張りが噛み合い、特に綱引きで勝てたのが効きました。チームワークの優勝ですわ」。

十四年前から大会会長を務めてきた小山さんは「平年前から青少年指導員を中心に取り組み、昨日は午後三時から、今朝は七時から準備しました。パンや弁当は中止になったら使えないので天気が一番心配でした。とにかく安全、そして親睦です」と話していました。

◆印象的だった組織性

運営委員会によると、この運動会は三十年近

←子供の懸命さが笑いを誘ったあめ喰い競争(上)とパン食い競走(下)



く前、団地が多い同地域の特徴を踏まえ、「団地住民と平地住民のふれあい」を目的にスタート。当初は仮装大会などもありましたが、「年々エスカレートし、お金もかかる」ということで中止に。今では「子供から高齢者まで楽しめる普通の競技」に絞って続けられています。早くから組織的に準備を進めているのも特徴で、この日の受付・放送・用具・賞品・救護・警備なども実到手際よく行なわれていたのが印象的でした。会場の至る所に溢れた笑顔また笑顔。地域挙げての郷土愛が、この日の日差しのように、熱く、眩しく感じられました。

アーケード下を激走

「韋駄天商店街」に大声援



→市民ランナーの激走に熱い声援が飛んだ

「韋駄天商店街」(写真は小学校低学年の

部の越智ひよりさんのゴール) 110月

14日、南市岡の繁栄商店街で

「スポーツを通じて地域と商店街を元気に」

と十月十四日、南市岡三丁目の繁栄商店街を舞台にした住民参加型イベント「韋駄天商店街」が開催されました。繁栄商店街振興組合(難波

利正理事長)の主催、筋肉商店街実行委員会の企画・制作、港区地域振興会連合会、港区子ども会育成連合会などの協力、大阪市、大阪商工会議所、大阪市商店会総連盟、港区小売商業協

同組合などの後援で六回目。

★79選手がタイム競う

正午からの開会式では田端尚伸・港区長らが

激励の挨拶。このあと参加者七十九人は見物人の声援の中、アーケード下に特設された百メートル

コース(スターティングブロック設置、網目加工のゴムシート敷設、完全電子計時)を次々と走り

り抜け、タイムを競いました。

夕方まで続いた熱戦の結果、小学校低学年の部(五十人、三十四人)では中石湊君(七歳、堀江小二

年)が八秒七五で、小学生の部(十九人)では角田星奈さん(十一歳、磯路小五年)

が十六秒〇一で、シニアの部(六人)では池野昌宏さん(四十六歳、大阪マスターズ)が十二秒

五〇で、レディースの部(三人)では赤谷早紀さん(十八歳、ビジュアルアーツ専門学校生)が十五秒〇八で、オープンの部(十七人)では荒川大輔さん(三十一歳、ノビートラッククラブ)が十一秒一七で、それぞれ優勝しました。

★来年は8秒台を狙う

このうち小学校低学年の部に出場し、自己ベスト九秒九を上回る九秒八二でゴールした白神元規くん(八幡屋小二

年)は「家のそばで二回くらい練習しました。走るの好きですが、他のスポーツや音楽も好きで、スイミングスクールに通い、ピアノも習っています。将来はプロ野球選手になりたいです。来年も参加して、できたら八秒台を出したいです」。母親の有由美さんは「学校で案内をもらって初めて参加しました。ゴール前で力を抜いたのが残念ですが、よく頑張ったと思います。このイベントは地域と商店街が連携し、港区の活性化に繋がる、とても良い催しだと思います」と話していました。

★お父さんより速かった

同じく小学校低学年の部で自己ベスト十秒二

ん(市岡小二)は「お兄ちゃん(同校四年の終一君)が去年出た(八秒七五で優勝した)ので、私もやれるかなと参加しました。お父さんと練習しましたが、私の方が速かったです。将来は空手の選手になりたいです。母親の美鈴さんは「一生懸命の大切さを体で覚えるよう、子供たちには普段からスポーツをさせていますが、このイベントにもそんな考えから参加を決めました。四十三号線の向こうに住んでいて、こちらにはあまり来ることがありませんでしたが、このイベントに参加することで、この商店街にはおいしいお寿司やお好み焼きの店があることを知りました」と話していました。

★港の商人の心意気

なお、この日の午後三時から八時半まで、同商店街に隣接する南市岡十一番街で「繁栄韋駄天尊祭り」が開催され、夜店や餅撒きが行なわれました。

「韋駄天商店街」の準備・運営に奔走した近藤洋史さん(五五)(繁栄商店街振興組合専務理事)は、「今回、小学校の部では築港を除く区内十小学校から参加があり、オープンの部では

陸上アスリートたちの十分の一秒を競う優勝争いで盛り上がり、参加するイベント、見せるイベントとして精度の高いものにできたと思っております。また運営に関しては、町会や地域から多くの方がボランティアとして参加して頂き、取り組みとしても有意義でした。住民がまっすぐに参加するきっかけとして裾野の広いスポーツは最適なジャンル。こうしたイベントを通じて地域が元気になり、商店街にも目を向けてもらえたら嬉しいです」と話していました。

消費スタイルの変化や長期不況で地域密着型商法の苦戦が続く中、町の活性化への貢献を通じて商店街再生を願う、港の商人の熱い心意気が伝わってくる催しでした。

スポーツ短信

■中学スポで築港、市岡東が市大会へ 大阪市

中学生親善スポーツ大会西ブロック大会(港・此花・西・大正区)が九月二十三日に開催され、男子ソフトボール港区代表の築港(九月二日の港区大会で準優勝)が大正東を十二対〇、市岡東を七対二で連破し優勝。同じく港区代表の市

岡東(港区大会で優勝)は此花を二〇対〇、大正西を七対二で連破、決勝では築港に敗れたが、港区勢で見事「ワン・ツー」を果たした。一方、女子キックベースボールは九月二日の港区大会で築港中が市岡東を二対〇で、市岡を八対二で、三先を四対一で三連破して優勝。これら男女三チームは十一月十八日の市大会に出場する。

■モリテック健闘 第四十五回大阪市長杯市民

ソフトボール大会が十月二十一、二十八日に開催され、男子二十四チーム、女子十七チームが出場。このうち男子の部に出場した港区代表のモリテック(瀬川哲郎監督、濱崎進主将)は一回戦で鳴野ナインズ(城東区)と対戦。健闘むなしく一対五で敗れた。

■少年野球MINATO連合(港ヤンキース、

福岡ヤンチャーズ、市岡アトミック、港侍ジャイアンツ、弁天ホワイトボーンズ、北恩加島少年野球部の軟式六チーム)主催の第十三回大阪市長杯・第十四回MINATO杯大会が八幡屋公園多目的広場などで進行中。大詰めを迎え四強が出揃う。少年野球の甲子園、舞洲ベースボールスタジアムでの準決勝・決勝戦(十一月二

十三日) 出場切符を手にした四チームは頂点めざして選手・指導者・保護者が最後の調整に入った。また同連合春季大会の最終戦が十月、八幡屋公園多目的広場で行われ、港ヤンキースの優勝で熱戦の幕を閉じた。 〇六五七六・七一九
一駿河。
するが

■大阪・港ボーイズ (少年硬式野球) 中学部は十一月三日に明石で練習試合をこなし、十八日、二十三日には高石大会に出場予定。三年生の卒団を受け、新メンバーでチーム始動。硬式に興味ある小中学生の体験練習・入部説明随時。 〇六五七一・六七五三スポーツさんわ又は 〇九〇・一二二六・四九六四平野。

■港区小学生バレーボール教室「大阪みなと」十二月は一日、十五日(土)に池島小で、二日、十六日(日)に南市岡小で、八日、二十二日(土)に三先小で九時から練習。九日(日)は恒例のクリスマス会。見学・体験歓迎。 〇七〇・五六五九・四八三一萬井。
よろい

みなとタイムスリップ

やまののり
紙芝居

きしもと やすし

南市岡在住画家 岸本 安司 (81)



公園のホームレス? 老人の

優しい姿に惹かれ

この油絵を描いたのは十年少し前のこと。グループ展などでお世話になっていた港区役所前の「ギャラリーはたなか」の前を毎日のようにとぼとぼと通りかかる、見るからにみすばらしい身なりの高齢男性が、妙に気にかかっていた。港区役所に尋ねると、「ホームレスの人やろ」「いや、夕風橋辺りに家を持ったはるで」
ゆうなはしあた

などと身元は定かではありませんでした。いつしか後を追うようになりましたが、もちろん本人は気付いていません。行き先は決まってる市岡元町公園で、そこに集まる鳩たち(はと)にパン屑(くず)をやっていたのです。

孤立し、自分の食べる物さえ覚束ない暮らしの中で、おそらく自分も口にしなければならぬパン屑を気前よく動物に分けてやる——その



→市岡元町公園で鳩にパン屑をやる男性の姿を描いた「わけわけ」(2000年頃)

姿にこの男性の優しき、また寂しさが滲み出ているように感じました。そして、この首の短い老人はどこで生まれ、どんな家庭で育ち、どんな仕事に就き、またどんな出会いや別れを経験してきたのだろうか—などと思いを巡らせたものでした。そうして何カ月もその光景を追いつけた後、目に焼き付けた映像をガラガラと掻き回し、これはと思う構図でポン！と描き出したのがこの絵だったのです。

「自分さえよければ」という風潮や「何でも自分で勝手にやりなさい」という政治がますます幅を利かせてきた現代社会。その寒々とした空気の中で、あの老人の姿が妙に懐かしく、また温かく魅^{よみがえ}ってきます。

ところで、この男性はその後しばらくして、ぶつくりと見かけんようになりました。

× × × × ×

きしもと・やすし 一九三二年港区生まれ。

しょうじま

小豆島暮らしを経て三先国民学校から大阪、香川の工業学校へ。戦後は工場勤めを経て城東保健所、大正保健所へ。演劇活動をきっかけに絵画を始め、定年後も独自の画風で描き続ける。

若者

平和叫んで何が悪い！

若者たちが音楽でアピール



「平和を叫んで何が悪い！」。港区や西区や浪速区で生活し、働く若者たちが十月二十一日、西区のミローホールで「ピースライブ」を催し、演奏やトークを通じて平和への想いをアピールしました。主催は「NMNピースライブ実行委員会」。午後一時から五時まで、若者を中心に多くの来場がありました。

♪原発やオスプレイに怒り

ライブでは八グループが演奏を繰り広げましたが、このうち女性デュオ「M&D」はトロンボーンで「虹を越えて」「さとうきび畑」などを演奏。トークでは「三・一一を通じて原発の恐ろしさ、反原発の声の強さに驚いた。危険な原発はきつぱりやめ、自然エネルギーに切り替えて」「基地の危険の上にオスプレイの危険が加わり、許せない。沖縄の心に寄り添っていききたい」と率直な感想や抱負を語りました。

♪戦争は終わっていない！

男女四人グループ「makiraran」は「全曲が愛と平和を歌っている」とビートルズナンバーをギターとタンバリンとボーカルで披露。メンバーの女性は「日本は平和やと思うた

→「平和のために出来ることを」と若者たちが声を上げた「ピースライブ」(写真はmakiraranの演奏) 11月21日

はりますか？」「慰安婦問題を知ったはりますか？」と問いかけ、「人々の心の中で、あの戦争はまだ終わっていない」と強調。医療関係の仕事に携わっているという男性は「戦争がないだけでなく、安心して豊かに生きられてこそ平和。今の日本は原発も社会保障も嘘ばっかりだ」。別の男性は「原発について一緒に考えよう。一つでも行動しよう」と呼びかけました。

♪危うい社会を危惧

八幡屋在住の女性ミュージシャン山口ももえさんは童謡「青い目の人形」をアカペラで歌った後、「自分も歌を作っているが、昔の歌には敵わない」と、「赤とんぼ」「故郷」「まっかな秋」



→八幡屋の山口ももえさんは懐かしい童謡などで平和な社会への想いを表現した

「ゴンドラの唄」などを巧みなギター伴奏で披露。独特のハスキーボイスが温かく響き渡り、聴く人の郷愁を誘いました。トークでは「夜のミナミで六〇七年、ギターやアコースティックで路上ライブを続けているが、年々マナーが悪くなっているのを感じる。目的を持ってない人、何にも関心がない人、東日本大震災は自分に関係ないという若者もいて、考えさせられた。根は良い人たちなのに」と、これも独特の語り口で、今の危うい社会への危惧や平和への想いを吐露しました。

♪友情や連帯のメッセージも

弁天在住の大学生・開千賢さん（実行委員長）らのデュオ「チラリずむ」は、「おいで！」「雨上がりの晴れた空」「花火」「Going」「心の叫び」など七曲を披露。友情や連帯、命の尊さ、明日への励まし、無意味な競争や争いへの反発などのメッセージを、時には叫ぶように、時には語りかけるように表現しました。

♪ダンス規制の見直しを

また、ライブの途中で開かれた「ダンス規制を考える」と題する討論会では、パネリストの

←弁天在住の大学生・開千賢さん②らのデュオ「チラリずむ」は「おいで！」など7曲を演奏し、友情や連帯を呼びかけた



弁護士や記者が「客を踊らせたらず逮捕する」という冗談のような規制がある」と風営法の問題点を指摘し、「憲法が保障する表現の自由、芸術・文化の自由を守るため、見直しを求めよう」と請願署名などの行動を呼びかけました。

♪若い人のパワーに感動

楽しそうに演奏を聴いていた宮本福夫さん とみお

(八四) (西区京町堀在住、元経営コンサルタント) は「たまには若い人たちの音楽や考えに触れたいと思う、参加しました。ビートルズあり、童謡・唱歌ありとバラエティも豊かで、楽しく過ごせました。個人的には『ゴンドラの唄』が懐かしかったです。自己中心的な風潮が年々広がる中、若い人たちの平和への想いやパワーが伝わってきて、感動しました」と話していました。

♪輪を広げていきたい

実行委員長を務めた開さん ひらき は「初めての試みで、どうなるか分かりませんでした。皆さんの人に来てもらい、平和への想いや願いが広がり、充実したライブとなりました。そして、このライブを通じて知り合った人たちと力を合わせて、またライブを開催し、どんどん平和の輪を広げていきたいと思っています」と話していました。

音楽

潮風にひびく歌声

天保山まつりで花☆キアラなど

赤レンガ倉庫をバックに爽やかな歌声が潮風に響きました。十月十三日に築港地区で開催



→ 赤レンガ倉庫を背に爽やかな歌声を響かせた花☆キアラのニッシー ⑤ とカオリン

された「第五回天保山まつり」(築港・天保山にぎわいまちづくり実行委員会主催) の「赤レンガ倉庫ライブ」に地元港区の花☆キアラなどが登場し、音楽で恒例イベントを盛り上げました。

♪息の合った夫婦のハーモニー

トップで登場した「花☆キアラ」は、市岡元町で暮らす夫婦のユニット。永遠の愛を確かめ合う「ラブソング」、何気ない日常の幸せをかしめる「マルゲリータとトマトパスタ」、平凡な自分に自信を持つとうと呼びかける「...だって」

—の自作三曲を披露しました。ニッシーこと西野成治 せいじ さんの伸びやかで力強い男声、カオリンこと西野香 かおる さんの爽やかで愛らしい女声、夫婦ならではの息の合ったハーモニー、ハイテクニックのギター & 口笛 くちふえ の伴奏が心地よく、歌の間にはさむ朗 はろ らかなトークはライブ冒頭の緊張感 やわ を和らげていました。

花☆キアラは二〇〇二年「花は土に咲くキアラバン隊」として発足、〇六年「花☆キアラ隊」に改名し、二〇〇九年から現在名。『心のパンになる音楽』をめざし、反戦平和、沖縄、従軍慰安婦、震災、原発など社会問題にも積極的に

関わりながら、現実への『憤』や庶民への応援などのメッセージを含んだ分かりやすい歌詞とメロディで、ファンの心を掴んでいます。

♪藤田さんらブルースな演奏

続いて登場した「藤田さんのグループ」は築港の日本パナユーズで働く藤田勝己さん（ボーカー&ギター）ら四人による促成ユニット。世界平和への願いを込めた「イマジジン」（忌野清志郎バージョン）、港区の風景をブルース風に綴った「ホンキー・トーンク・トレイン・ブルース」など三曲を、促成とは思えないコンビネーションで披露し、喝采を浴びていました。

芸能ニ情報

●八幡屋在住の演歌歌手・杉俊一さん 十二月十六日（日）十三時半から道頓堀ホテル（中央区道頓堀二・三・二五）で「クリスマスディナーショー」を予定。会費二万円。歌唱会（2コース）への申込締切は十二月五日（先着十名）▽☎六五七一一・三九三三SUNプロダクション。

演劇

パワフルな笑いで包む

市民劇団が「銭湯」テーマに



ごく普通の市民による劇団「弁天喜劇笑天下」による公演が十月十四日夜、弁天町市民学習センターで行われ、観客百数十人をパワフルな笑いで包みました。

上演されたのは「銭湯」をテーマに、港区の架空の公衆浴場「弁天港温泉」を舞台にした喜劇『弁天港温泉湯けむり事件網』はだかのおつき合いませんか？。高齢化や設備老朽化で廃業する例が後を絶たない銭湯の実情を踏まえ、「銭湯が果たしてきた」地域の健康と交流の場」という役割を、笑いの中で考えてもらえたら」と、区内の元銭湯経営者からの資料提供などを得て脚本化されたもの。

◆爽やかなサスペンス人情喜劇

——その事件は奇しくも「弁天港温泉」廃業の日起こった。脱衣ロッカーから合鍵で馬券を盗んだのは一体誰か。さつそく刑事二人が捜査に入り、入浴客を片っ端から取り調べる。熱烈な銭湯好きは共通だが、個性的というよりかなりけつたいな連中に散々振り回されながらも、やがて、全く無関係と思われた酒屋の老女の秘められた過去から、彼女とその娘の仕業で

→「銭湯」をテーマに笑わせながら考えさせた『弁天港温泉湯けむり事件網』はだか

のおつき合いませんか？』の一場面

←吉本も顔負けのパロディやダジャレも次々



あることを突き止める。が、そこへ本物の刑事二人が現われ、ニセ刑事らを逮捕。さらには彼らと常連客の大半がグルになっていたことも明らかに、過去に例を見ない大がかりな組織犯罪が遂に暴かれた。：かに見えたが、風呂屋の主人の「まあええやないか、裸になったら皆おんなじや」の一言で事件はなかったことに。戸惑う刑事たちを脇に追いやり「♪いい湯だな、ハン」と大合唱。まさに湯煙に巻かれた結末とは相成った――。

ナンセンスギャグあり、ダジャレあり、テレビ番組のパロディあり、ちよつとエッチなシーンあり――の騒然たる舞台から、「心の繋がりと

笑いさえあれば、どんな苦境からでも人は這い上がる」と感じさせてくれる、前向きで爽やかなサスペンス人情喜劇でした。

◆楽しんでやっていた

最前列で孫と一緒に観劇していた相阪浩己さん(七八)(守口市)はこの前の子供喜劇(八月二十六日＝前号既報)では孫二人が出演し、今日は娘が風呂屋の奥さん役で出演しました。ようやっていたと思います。仕事や家事を抱えながらの練習は大変なので、無理せんようにと心配していますが、楽しんでやっているの、まあええかと思っています」と話していました。

◆皆で作り上げる喜びが

銭湯の常連客を演じた川口雪子さん(池田市)と足立美帆さん(天王寺区)は共に初めての出演。週一回ペースで二ヵ月ほど練習し、本番を迎えたそうです。「基本的な筋書きや台詞はありましたが、稽古の中で自分に合うよう言葉や動きを変えていけるのが楽しかったです。回数を重ねるうちに気持ちも一つになり、新しい台詞も生まれるなど、皆で作り上げていく喜びがありました」と話していました。

◆個性生かして脚本

「笑天下」は「ごく普通の市民で喜劇集団を作り、地元港区などをテーマに、笑いで人や街を元気にしよう」と同センターが企画した講座「弁天喜劇笑天下」の受講生で作られる劇団。一昨年十月にスタートし、大阪出身の放送作家・砂川一茂さんの指導で喜劇の基本を学び、稽古を重ね、二〜三ヵ月で本番を迎えます。今回の受講生はその五期生で、老若男女二十数人。一人ひとりの個性を生かして砂川さんがオリジナル脚本を作成し、受講生の声も採り入れながら本番へと仕上げていきました。問い合わせは☎六五七七・一四三〇同センターまで。



より良い 余生のために 自叙伝を!

お話をききとり、冊子
にしてお渡します。

芸術の世界でそれなりに実績を積み、環境保護など社会貢献もしてきたと自負していましたが、一度これまでを振り返り、今後の跳躍台にしたいと冊子化を依頼しました。他人に聴いてもらうことで新たな発見もあり、それ自体が貴重な体験でした。(60代女性)

400字(原稿用紙1枚)で
千円が標準料金です。

★文書全般の代筆も承ります★

港新聞・飯田編集事務所 ☎6571-4636

茶聖の心の軌跡辿る

石炭倉庫『千利休物語』が好評

あづちもやま
安土桃山時代の茶聖の心の軌跡を辿った
『千利休 花は野にあるように』が十月下旬



→茶聖の心の軌跡を辿りながら、慌ただしい現代社会への警鐘も発した『千利休物語 花は野にあるように』の一場面

フリースペース
に波除の自由空間「石炭倉庫」で上演され、好評でした。作家の故綾羽一紀さんが脚本、直木賞作家・難波利三さんが監修。港区の庶民劇団「あんがよいおまる一座」が、あんがよいおまるさんの演出で演じました。

◆信長 秀吉に仕えた茶人

——大永二（二五二）年、和泉の国・堺の商家に生まれた与四郎（後の利休）は若年より茶の湯に親しみ、十八歳で武野紹鷗に師事、共に茶の湯の改革に取り組んだ。織田信長の茶会では茶頭を務め、本能寺の変の後は豊臣秀吉に仕えた。六十四歳で「利休」の号を受け、有名な北野大茶会を取り仕切るなど茶人として名声を誇る一方、自然と一体となる『侘び茶』

の完成へと向かっていった。が、天正十九（一五九一）年、「天下は盗つても民衆の心は掴めない」との忠告が秀吉の逆鱗に触れ、切腹を命じられた。弟子や家族の助命にも「私の問題だ」と取り合わず、釈明も謝罪もしないまま死に就いた。享年七十——。

◆虚偽と作為の現代に警鐘

「茶室にはこの空間だけの宇宙があります。」

その中に身も心も委ねればいいのです」「西瓜には西瓜の味がある」「花を野に咲くように自然に入れる。その花を見てみると、野辺の風景が浮かんでくる」「主人も客も清らかな心で臨む。侘び茶の道は、もともと仏教の悟りの道に通じる心の濁りのない人でなければなりません」「胸をかきむしる苦しみや悲しみがあっても、いつかはそれも消える時が来る」——など、随所に散りばめられた珠玉のような台詞が積み重なりながら、自然と一体になろうとした利休の生き方を浮かび上がらせ、虚偽と作為と慌ただしさに満ちた現代社会への警鐘とも風刺ともなつて、胸に迫りました。

同劇団の座付き作家であつた綾羽一紀さんの歴史への造詣の深さと人物描写の的確さ、そしてそれらを通じて少しでも世の荒廃を止めたなどの願いが、改めて読みとれる脚本でした。

◆秀逸だった主演の表情

役者では利休を演じたヨッシー原本さんの落ち着いた演技、特に枯淡の境地へと深まりゆく表情の変化が秀逸でした。また、あんがよいおまるさんのメリハリある語りは場面転換の

心地よいアクセントとなり、背景に使われた温かく飄々とした人物画（はねおかじろうさん）は、役者の少なさを補うだけでなく、人間的な劇の主題を象徴する役割を果たしていました。全体として、毎月一公演超の高密度スケジュールにも拘らず、小品でも手を抜かず、必ず何らかの社会的メッセージを込めようとの同劇団の姿勢が改めて感じられた舞台でした。

演劇ガイド

●「こどもOH! 笑い塾」『弁天喜劇』でクリ

スマス」参加者募集と舞台発表 「弁天喜劇・笑天下」（32頁に記事）講師で放送作家の砂川一茂さんが「人を笑わせ、自分も元気に!」「喜劇はチームワークとコミュニケーションやで!」と、小・中学生ら二十人を楽しく集中的に「お笑い特訓」。十二月十五日（土）十三〜十六時、十六日（日）十時〜十六時に弁天町市民学習センターで。最終日十五時から舞台発表（観劇無料、申込不要）。詳細・申し込みは☎六五七七・一四三〇同センターまで。

●あながいおまる一座・年の瀬特別企画「怪談

をまたまた食す 明治から昭和に至る怪談文学の名品を朗読と生演奏で。お盆上演の好評を受け、読み手を増やしての第二弾。朗読はヨッシー原本、ゆうこ、岡戸淳子、くめくめこ、あながいおまる。バック演奏（電気ギター）は妖怪博士としても有名なミュージシャン亀井澄夫。演出はあながいおまる。上演作品は『みだらな儀式』（源氏鶏太）『抒情歌』（川端康成）『沼垂の女』（角田喜久雄）『松助怪談』（邦枝完二）『地下街』（中井英夫）『進化論の問題』（新羽精之）『銀色の海』（竹内健）『マストの上の怨霊』（伊波南哲）『猫が物いふ話』『猫の踊』（森銃三）『はだか川心中』（都筑道夫）。十二月二十二日（土）十四時、二十三日（日）十三時。前売料金は土曜全日二千四百円、日曜全日三千二百円。上演スケジュールなどの詳細問い合わせや申し込みは会場の石炭倉庫（波除六・五・一八、JR弁天町駅から国道四三号を北へ直進、安治川堤防突き当たり右すぐ。☎六五八一・〇六六四、FAX六五八一・二六七〇、チケット専用フリーダイヤル〇二二〇・三三四・一三九）へ。

ひとくちPR

（1行||税込1000円）

●何でも書きます、まとめます 手紙・案内・報告・宣伝・司会等の文案。自分史・社史・団体史等の聞き書き。新聞・広報・書籍・会報等の取材・編集。☎6571・4636港新聞・飯田編集事務所。

●放課後・春夏冬休みは学童保育へ 入所見募集。見学無料・体験OK。家族的雰囲気。区内に二カ所。☎6575・0335ありんこ。

読者プレゼント

※いずれもハガキに今月号の感想とプレゼント名を書いて20日必着で港新聞へ。

●交通科学博物館（ミニミニ案内）招待券をペア2組に。

●関西フィル『第九』特別演奏会（ミニミニ案内）招待券をペア1組に。

●あながいおまる一座「怪談をまたまた食す」（演劇ガイド）招待券をペア2組に。

●ガットネロ「松浦由美子のシャンソン百物語 77」（ミニミニ案内）招待券をペア1組に。

平和のため



語り継ごう

今月の語り部

せんが まりこ

千賀 万里子さん(79歳、港晴) ㊤



(前号あらすじ)

昭和七年に北朝鮮で生まれた

私は、父が三菱の鉱山長をしていた関係で何不自由ない生活を送っていたが、敗戦で暗転。現

地人の復讐などに怯えながらの八カ月、収容

よ

所生活を余儀なくされた。昭和二十一年四月半ば、三十八度線越えを目指す決死の脱出行が始

まった」

故国へ決死の逃避行

脱路続出も38度線越える

◆地元男性の道案内で

道案内は地元・北朝鮮の男性で、日本人からお金を貰^{もら}ったの役目とはいえず、「ばれたら私も銃殺ですよ」と言っていました。私たちはその先導で、春とはいえまだ寒く、「坊主の山」といわれるほど緑の少ない殺伐とした北朝鮮の山中を、一千人が長い長い列をなし、道端で売^{もち}っている餅や飴^{あめ}を買って食べながら、たまに村人などから調達した馬車に乗れることもありましたが、大半は徒歩で進みました。皆ほとんど無言で、靴はボロボロになり、裸足の人もいました。十三歳の私は、幼い弟や妹をおぶってやったり、手を引いてやったりしながら、必死の思いで付いて行きました。夜は道端に野宿しました。

◆脱路者も続出

途中、病気や体力消耗で倒れ、担架^{たんか}に乗せら

れる人、力尽きて亡くなる人が何人もいました。死体は茶毘^{だび}に付す(火葬にする)ことも出来ず、道端の木の根元に横たえて布を被せ、皆で掌を合わせました。

乳が出なくて泣き叫ぶ赤ちゃんもおり、「(泣き声が)皆さんの命取りになつてはいけない」と我が子の口にタオルを入れて窒息させてしまった若い母親もいました。そうして息絶えたと思った小さな体が、そのまま背負われ続けた刺激で息を吹き返し、母親は泣いて喜び、私たちも「良かった!」と胸をなでおろした。そんな出来事もありました。

◆案内人の駆け引き

一行を悩ませたのは、道案内人の巧妙な駆け引きでした。「これ以上は危険で案内できないので帰る」と持ちかけ、リーダー役の父が「これで何とか頼む」といくらかお金を差し出すと、また案内してくれる、ということが四〇五回繰り返されたのです。

この時役立ったのが、終戦で「軍票(戦地や占領地で軍が正貨に代えて発行した紙票)を二千元以上持つてはならない」と言われた時に、

父が秘かにリュックやズボンに縫い込んでいたお金でした。これがなければ恐らく逃避行を最後まで続けることは出来なかったでしょう。

◆38度線越えた！

そうして十一日間歩き続けた末、私たちはようやく三十八度線を見下ろす地点(確か「沙里院」という所でした)に辿り着きました。が、「見つかれば銃殺」の危険は逆にピークに達していたので、私たちはそこで二日間、周辺の様子を窺いながら息を潜めて伏せていました。そして完全な闇夜を待つて国境越えを決行したのです。月もない真つ暗闇の中、私は弟を背負い、妹の手を引き、谷川へ落ちたりしながら無我夢中で付いて行きました。

◆米軍の歓迎に驚く

そうして遂に私たち三菱鉱山の社員と家族二千人は、三十八度線は無事突破することが出来たのですが、そこで待っていたのは、それまで体験したことのない「空気」でした。それはアメリカ兵の言動に表われていました。彼らは当時、ソ連との対抗上、南朝鮮に進駐していたのですが、旧敵国民に対するとは思えないその

←持てるだけの物を持って上陸した朝鮮

半島からの引き揚げ者(昭和20年10月19日、博多港)



歓迎ぶりに「これで助かった!」と子供心にも実感したものでした。

彼らは私たちに消毒用の真っ白い粉(DDT)を頭から振りかけ、身体検査をしました。そして、英語が話せる父に向かって「なぜこんなに

お金を持っているのか?」と問い、「ワイフ(妻)を連れて来なさい」と命じました。母が来ると、そのお金の半分を「これはユー(あなた)の物だ」と母に持たせたのです。それを見て子供の私はただ目を丸くしていましたが、後に戦後教育を受けた時、「あれが民主主義だったのか、男女平等だったのか」と納得したものでした。

◆列車で釜山へ

そこから私たちは石炭を運ぶ貨物列車にすし詰めにされ、立つたまま何日も揺られて釜山に到着。釜山港から何隻かの貨物船(米軍の上陸用舟艇だったかもしれません)に分乗して、また何日か揺られ、ようやく島根県の境港に着きました。境港の町は一面焼け野原だったのを覚えています。また貨車や貨物船では満州から引き揚げて来た人たちとも一緒になりましたが、その人たちは私たちより更に酷い身なりで、みな裸足でした。

◆境港から郷里へ

そうして境港からまた列車に揺られ、忘れもしない四月二十一日、父の里である懐かしい三重県四日市市へ帰り着いたのです。が、その道

中のことは、なぜかよく覚えていません。

ともかくも私たち家族七人は誰ひとり欠けることなく故国こくにくの土を踏むことが出来ました。が、その道中の波乱に富んだ出来事の数々、中でも亡くなった身内みうちの遺体を置き去りにせざるを得なかった方たちの悲痛極まる光景は、引き揚げの過酷さ、恐ろしさ、悲しさとして子供心に焼きつき、今も昨日のことのように鮮明に思い返されます。

とはいえ私の家族にも戦争の犠牲は出ました。

(つづく)

文化・教養

ふるさと

故郷の話をしよう

島根県・隠岐島出身

川井 稔さん (磯路) 〈中〉

「ト鳴る花火 並ぶ夜店に 縁日の町の灯

」(昭和四十年北原謙二『ふるさとはなしを

しよう』)。生粋の港っ子にとっても、最近

引越してきた住民にとっても、さらには地方

出身者にとっても、慌ただしい都会生活の中で、

まだ見ぬ異郷いきように思いを馳せるのは、時空間旅行

にも似た快感ではないでしょうか。そこで、幼

少期・青年期の悲喜交々を織り混ぜながら、皆

で故郷の話をしましょう。そのトップバッター

は、遙か日本海の隠岐島から十五歳で上阪し、

現在は磯路三丁目「珈琲館 隠岐」を営む川井

稔さん(六四)です。前号では、生まれ育つ

た西ノ島(隠岐諸島の一つ)での遊びや風習を

語って頂きましたが、今回は子供時代の家族生

活や学校の思い出を。

× × × × × × ×

◆家族で力合わせ生活

さて、島ではどの家族も皆で力を合わせて生活していましたが、早くに父を亡くし、母が外



→ 中学校から遠足で訪れた知夫里灯台。
西ノ島の南側の知夫里島の岬にある

で働き、長兄と姉も中学を卒業して働きに出
ていた私の家では、下の男兄弟三人（次兄・私・
弟）が重要な役割を果たしました。

私が低学年の頃まで島には水道がなく、おま
けに家に井戸はありませんでしたから、家から
三十ほどの所にある、部落に一つの共同井戸
が頼りでした。私たちは毎日そこから汲んで来
ては、柄杓で大きな水瓶に移し、生活水を貯え
ました。

同じ頃、ガスもなかったので、「樵に行こう」
と燃料の芝を刈りに山へ行き、大八車に積ん
で運び帰りました。そうして得た芝や薪を使っ
て、おくど（かまど）でご飯を炊いたり、七輪
でおかずを焼いたり煮たりもしました。そんな
時、杉の葉っぱは着火しやすく、重宝したもの
でした。

ただ、未だに怖い思い出として焼き付いてい
るのは、大好きなドーナツを揚げていて、その
油に七輪の火が引火し、ボンと大きな火柱が
立ったことでした。火事には至らなかったもの
の、さすがに子供三人で肝を冷やしました。

この他、川原で洗濯したり、畑でジャガイモ

やサツマイモを収穫したり、とにかく家事と労
働の全分野を子供が担っていたのでした。

◆ガスもなく電気も弱かった

さらに島では、今言ったように、私の小学校
低学年までは水道がなかった上に、発電能力が
弱く、夜八時ごろになると電灯が消えました。
代わりに点したのが灯油ランプでした。そして、
その火舎（火を覆い包むガラス製の筒）を掃除
するのも、やはり子供の役目でした。

水道が通り、電気が「全灯」になり、プロパ
ンガスが使えるようになったのは、私が小学校
五、六年生の頃。「便利になったなあ」と家族み
なで喜び合ったものでした。



→西ノ島の名勝・国賀海岸にある蝸燭岩

◆四季の遊び

そんな、ラジオもテレビもなかった島で、私
たち子供は皆、今で言う「アウトドア」の遊び
をしました。神社の境内での三角ベース野球な
どはもちろん、秋には山へ分け入ってアケビ、
フユビ、ノイチゴ、クリなどを採り、雪深い冬
にはスキーや橇遊びを楽しみました。それも、
今のように市販の用具などない時代でしたから、
自分たちで作りました。竹藪から竹を斬り出し、
先端を炙って反らせ、中央には足を載せる板を
貼り、大人から譲ってもらった使い古しの革バ
ンドで足を留める―等々、子供なりに様々な
工夫を重ねた、いわば「ハンドメイド」でした。

◆学校生活あれこれ

私が学んだ美田小学校へは田んぼの中を歩い
て通いました。一クラス四十人弱で、三クラス
あったように覚えていますが。また中学校は西ノ
島に二校あり、私が通った黒木中学校は一クラス
四十人ほどで、三クラスありました。山を越
えて歩き、一時間はかかりました。校庭で時間
を忘れて遊びまくった帰りには道がすっかり暗
くなっていて、とても怖かったのを覚えていま

す。その道中の余りの遠さ、険しさに、結婚前に訪れた妻はびつくりしていました。

島の冬は、緯度から想像されるほどの寒さではありませんが、それなりに厳しいものでした。が、貧しい小学校の教室にはストーブがなく、火鉢を幾つも隅々に置いて凌いでいました。六年生でようやく石炭ストーブがつき、中学に入っても石炭ストーブがあつて、ホツとしたのを覚えています。登校中に雪で靴下がびしょしよになり、それをそのストーブの煙突にかけて乾かしたのは懐かしい思い出です。

◆父が早逝、母に育てられる

ここで少し私の生い立ちを話しますと、私は昭和二十二(一九四七)年十一月に島根県知夫郡黒木村美田大津(現・隠岐郡西ノ島町美田大津)に生まれました。五人兄弟姉妹(十歳上の長兄、八歳上の姉、三歳上の次兄、私、三歳下の弟)の第四子(三男)でした。

父は外国航路の船員で、年に一回家に帰るかどうかの生活であつた上、私が三歳の頃、四十歳の若さで病死したので、父を巡る思い出はほとんどありません。その父に代わって私たちが

「西ノ島名所の一つ、船引運河。大正4年に島の中央部の細く括れた300メートル幅の地点に開削された。昔は船を陸に引き上げて外海へ出したことからその名がついた。これは私が中学生だった頃の風景



供を、父親役も果たしながら養育してくれたのが母でした。次号では、今は亡き、その母の思い出などをお話したいと思います。(つづく)

ミニミニ案内

●交通科学博物館「特急百年〜時代と共に駆けろ〜」一九二二(明治四十五)年六月に「特別急行」が誕生して今年で百周年。一般人が乗れない「豪華列車」だった登場時から、全国に特急網が形成された昭和中期を経て、現在の多種多様なニーズに対応する「便利な列車」になるまでの「特急ヒストリー」を三コーナーに分けて紹介Ⅱ写真はイメージ。「時代と共に駆けた「特急列車」」では特急誕生以来の歴史を「各時代を象徴する特急」を中心に模型や写真などで紹介。「華麗なる「特急列車」」では大正・昭和期に活躍した客車特急、高度経済成長期に活躍した電車特急、現在活躍するトワイライトエ



クスプレスーに焦点を当てて車両や時代背景

サービスなどを紹介。「私鉄特急いろいろ」では
パノラマビューや車内の居住空間のクオリティ
で名高い全国の主な私鉄特急を、写真や路線図
などで紹介。展示予定の資料は、特急「富士」

「燕」トレインマーク、戦後の機関士制服（複
製、キハ81形ディーゼルカー模型（縮尺二〇

分の二）、客車特急の食堂車制服（複製、「トワ
イライトエクスプレス」制服、特急「こだま」

トレインマークなど。来年一月二十七日まで開
催中▽十十七時入館、月曜休館（祝日なら開

館し翌火曜休、火曜も祝日なら振替休なし）。高
校生以上四百円、四歳〜中学生百円。JR弁天

町駅すぐ。〇六五八一・五七七二。

●関西フィルハーモニー管弦楽団「第九」特別

演奏会 「ベートーヴェンが原点に帰り、多く

の人々に理解してもらえる本当の意味での「音
楽」として創り上げたのが『第九』ではないか」

という大友直人^{おおともなおと}Ⅱ写真^{おともなおと}（©kaburagi-

amanagroup）Ⅱが渾身のタクトで歓

喜の時空間を創出する。ソプラノ…並河寿美、

アルト…福原寿美枝、テノール…小貫岩夫、バ



リトン…田中勉。合唱…田辺第九合唱団。演

奏曲目は①モーツアルト…歌劇「皇帝ティート

の慈悲」序曲K.621②ベートーヴェン…交響

曲第9番「合唱付」ニ短調作品125。十二月十

五日（土）十七時からザ・シンフォニーホール

（JR環状線「福島駅」から北へ歩約七分）で。

十六時四十分から指揮者プレトーク。S席六千

円、A席五千円、B席四千円、学生席千円（全

席指定・消費税込）。〇六五七七・一三八一。

●港図書館 ①図書展示「芸術に親しむ本」展

〇十一月一日（木）〜十二月二十七日（木）。展

示リストあり②おたのしみ会Ⅱ幼児を対象に毎

週水曜十五時半〜十六時。絵本の読み聞かせや

紙芝居、パネルシアター、手遊び、わらべうた

の紹介など。申込不要③あかちゃんのおたのし

み会Ⅱ赤ちゃんと保護者を対象に毎月第一金曜

十一時〜十一時半。赤ちゃんが絵本に親しめる

よう工夫。申込不要▽〇六五七六・二三四六。

●弁天町市民学習センター「アイリッシュバン

ドがやってくる！」同センター二十周年プレ

イベントとして本格的アイリッシュバンド「I

NESHEER」（イニシア）を招待。聴い

ているだけでワクワクする歌と踊りの世界。十

一月二十五日（日）十四時〜十五時半。入場料

千円（二飲物付）。要電話予約。先着百名。前

売券（八百円）販売中。〇六五七七・一四三〇。

●ガットネロ 市岡在住のシャンソン歌手・松

浦由美子さんⅡ写真上Ⅱ主宰の音楽喫茶。毎月

様々な企画。①HAMORI・BE（はもりべ）

のうた★カフェⅡ十二月二十日（木）十九時、

二十一日（金）十四時。若手テノールデュオ（中

川公志・小原有貴）Ⅱ写真下Ⅱが日本の懐かし



い歌を贈る。ピアノ…古谷優子。会費各二千五百円（二飲物付、定員十五人、要予約）②松浦由美子のシャンソン百物語第七十七回「シャンソンのなかの女たち…人生の喜びや哀しみ、苦しみや怒りをシャンソンに託して」〓十二月十六日（日）十五時。歌…松浦由美子。ピアノ…藤田稔。会費二千五百円（一飲物付）③クラシ

ツク・カフェ^{あや}十二月七日（金）十九時。河端^{かわばた}
綾^{あや}（ヴァイオリン）十宮崎剛^{つよし}（ピアノ）。会

費二千元（定員十五名、要予約）④午後のシャ
ンソンⅡ十二月二日（月）十五時。ピアノ・藤
田稔⑤こもればカフエⅡ十二月一日（土）十五
時。ピアノ・津軽三味線・久保比呂誌ひろし。会費二
千元（二飲物付）⑥朗読カフエⅡ十一月二十四
日（土）十四〜十六時。参加費千元（飲物付）。

簡単な体操と発声、朗読体験、「朗読の会」メンバーによる朗読『じごくのそうべい』▽ガツトネロは天王寺区上本町六・二・三七、地下鉄谷町九丁目駅⑪出口、**六**六七六七・〇〇二一。

●港近隣センター・懐かしの名画劇場『平成狸合戦ぽんぽこ』
開発が進む多摩ニュータウン

『合戦ぼんぼり』 開発が進む多摩ニュータウン
を舞台に、静かな暮らしを取り戻したい狸たち

ばけがく
が化学を駆使して人間に抵抗を試みる様子を
描いたアニメ作品。監督は高畑勲。声の出演

は野々村真、石田ゆり子他。一九九四年スタジオジブリ製作。十二月十四日（金）十四時〜。

協力金百円▽同センターは八幡屋一、四、二〇
(入舟公園隣)。問合せは☎六五七二、〇〇二〇
(財)大阪市コミュニティ協会港区支部協議会へ。

●シネ・ヌーヴォー「追悼特集 女優・高峰秀子
アンコール」 卓越した演技力と美しさで日本

映画の黄金時代を駆け抜けた名女優の追悼シリーズ第二弾。
成瀬巳喜男監督作品など十七本を
なるせみきお

十一月二十三日まで上映中。十六日以降の上映作品は『我が家は楽し』（一九五一年中村登）『煙突の見える場所』（五三年五所平之助）『女とい

ふ城 マリの巻』(五三年阿部豊)『女といふ城
夕子の巻』(五三年阿部豊)『浮雲』(五五年成瀬)

巳喜男『妻の心』(五六年成瀬巳喜男)『あらく
 れ』(五七年成瀬巳喜男)『張込み』(五八年野

村芳太郎)『女が階段を上る時』(六〇年成瀬巳喜男)『名もなく貧しく美しく』(六一年松山

善二『乱れる』(六四年成瀬巳喜男) Ⅱ写真上
ろくじよう『六條ゆきやま紬』(六五年松山善二) Ⅱ写



真下『続・名もなく貧しく美しく 父と子』(六

七年松山善三。当日一般千四百円。上映時間など詳細は同館（地下鉄九条⑥出口歩三分六五八二・一四一六）へ。

●川島恵美子作品展

●川島恵美子作品展 平和の願いをキャンバスに込めて絵画人生を送ってきた川島恵美子さん（八一）（八幡屋在住）が昭和三十六年からほぼ毎年開いてきた個展。五十回目。リアリズムを基調にした迫力と温かみのある風景描写が特徴。油彩・水彩など。第二画集の展示も予定。十一月二十三日（金祝）～十二月二日（日）の十一～十八時に『ガレリア・リバリア』で。入場無料。三先二・一三・二八（みなと通沿い、地下鉄朝潮橋駅すぐ）、☎七五〇二・四一八八。